
阿波野治の八百文字劇場

阿波野治

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

阿波野治の八百文字劇場

【Nコード】

N1413J

【作者名】

阿波野治

【あらすじ】

原稿用紙二枚以内に収まる小説を集めた掌編小説集。

恋心

男子高校生の明は、妹の亜紀に恋心を抱いていた。亜紀と同じ時間を共有し、同じ場所で過ごしたいと思うことは常だったし、手を繋ぎたいと願い、キスすることを夢見ていた。血の繋がった妹に恋愛感情を持つのは異常だという自覚はあったが、その甘く引き寄せられるような想いは無視できなかった。

だが、中学生になった亜紀は、自ずと兄から距離を置くようになっていた。仕方ないことだと明は思ったが、同時に淋しくもあった。次第に遠くなっていく亜紀との距離に比例して、彼女への想いは一層深まっていった。

両親が結婚記念日の旅行で家を空けた夜、明はとうとう過ちを犯した。妹の部屋に這入り込み、寝ている亜紀を力尽くで犯したのだ。最初亜紀は抵抗したが、やがて覚悟を決めたかのように兄の拙い手解きに身を任せた。亜紀は兄に処女を捧げ、明は童貞を捨てた。事後、明は亜紀に嫌われないかと心配した。近親相姦の罪を犯したことや、亜紀を傷つけたことに対する罪悪感もあったし、両親に告げ口されるかと思うと夜も眠れなかった。

だが亜紀は、そのような素振りを見せる所か、明と同じ時間を過ごしたがるようになり、逆に自ら性交を求めるようになった。どうやら亜紀にも兄への恋心が芽生えたらしい。

そんな妹の変化に、明は最初困惑したが、亜紀が好きという想いは変わらないから、結局はその要求を受け入れた。罪悪感を覚えつつ、夜ごとに密かに体を重ねる関係が続いた。

やがて亜紀が成人を迎えたある日、兄妹は両親に呼び出され、二人には血の繋がりが無いという事実を告げられた。明は、母の前夫の連れ子だったのだ。

その真実を知った亜紀は、近親相姦を行う罪悪感がなくなることを楽しんだが、明は妹への恋心が急速に冷めていくのを悟った。

その日以来、明は亜紀とセックスをしなくなった。最近は、二十五にして初めて出来た彼女に逢いに、よく家を空けるようである。

うっかりミズキちゃん

女子高生・ミズキに、待望の彼氏が出来た。名前はシュン。端正な顔立ちをした、懐が広い性格のクラスメイトの男子だ。

そのシュンが、ミズキの家に遊びに来ることになった。料理が得意だとミズキが言うと、シュンが手料理を食べてみたいと切望するで、休みの日にミズキの自宅で振る舞うことになったのだ。作る料理は、シュンが好物だからとリクエストしたカレーライスだ。

そして迎えた日曜日。エプロン姿で台所に立ったミズキは、リビングからのシュンの視線に緊張しつつ料理を開始した。豚肉、ニンジン、タマネギ、ジャガイモ……。用意した食材を次々に刻んでいく。

あとは材料を煮込むだけの段取りになったとき、ミズキはカレーのルーを買い忘れていることに気がついた。ご飯はちゃんと炊いてあったから、足りない食材はそれだけだったが、しかしながらそれがないとカレーは絶対に出来上がらない。今からスーパーにルーだけ買いに行くという手もあったが、シュンをこれ以上待たせることは気が引けた。

対応に窮したミズキは、錯乱した手つきで皿の半分には生の野菜と肉を盛り、もう半分に炊き立てのご飯を装うと、スカートとパンツを脱ぎ捨ててその上に跨り、排便を開始した。緊張気味で便が柔らかかったたので、排便に手間は掛からなかった。

調理を終えたミズキは、シュンの前にカレーの皿を置き、遠慮がちに勧めた。シュンは目を輝かせ、眼前のそれを「美味しそう」と評して、早速スプーンですくって食べた。

一口分を咀嚼し終わると、シュンは訝しげにミズキの顔を見た。ミズキは顔を真っ赤にして眼を瞑った。シュンは静かな口調で問い質した。

「あのさあミズキ、お前……何で下半身裸なの？」

ある屍体

行きつけのペットショップで飼い猫の餌を買って帰り、自宅へ続く坂道を上っていると、道の中央に数羽のカラスが輪を成し、夢中で何かをついばんでいる。

真横を自動車が猛然と通過しても、羽ばたいて最小限横に回避するだけで、すぐに舞い戻ってきてまたしきりに地面をつつきだす。よほど美味しい食い物が落ちているらしい。

カラスたちが車を避けた時に、一群の中心にあつた物体が数秒間目に留まったが、何やら赤っぽい物体のようである。車に轢かれた動物の屍体が転がっているのだと見当はつくが、一見しただけであるからして、何の動物の屍骸なのかという点までは判別できなかった。

横を通りかかる際、何気ない心持ちで輪の中心を覗き見て、驚いた。カラスたちがついばんでいたものは、予想した通り何らかの動物の屍体であつたのだが、その骸は皮が引き剥がされて肉の赤と骨の白ばかりが露出していて、生前の原型を全く留めていなかったのである。屍体というよりは単なる肉の塊で、最早猫か犬かの弁別すらつかない。そのグロテスク極まる赤い固形を、カラスたちはご馳走をかつ食らうように貪っているのだった。

見ていて決して快いものではない。喉の奥にうつすらと嘔吐感が滲んだのが自覚される。私が動物の好きな質なだけに、不愉快に感じる気持ちはより強い。餌の入ったレジ袋を握り直し、足早に現場から立ち去った。

自宅に着いて、餌の袋を玄関マットの上に下ろし、愛猫のマロンを呼んだが、青い首輪のシャム猫は姿を見せなかった。愛想だけが取り柄の猫が今日はどうしたのだろうと思ひ、三和土に突っ立ったまま再度名を呼ぶと、奥からマロンではなく妻が走り寄ってきて、心配そうな顔で早口に言った。

「あなた、マロンが家にいんだけど、見なかった？　あなたが出かけた時に外に出て行ったみたいんだけど……」

ワールドトラベラーモトイ 最終回

世界に散らばる様々な「未知」を求めて、私とジオは草原を旅していた。時折吹き抜ける微風は青草を一斉になびかせ、私達のいくらか疲弊した体を清爽と癒した。

ツンドラオオヤマネコのジオは私の大切な相棒だ。体力と敏捷性、それに忠誠心なら誰にも負けはしない。食料調達に荷物の運搬にと、実に多くの場面で活躍してくれている。

やがて私達は、緑の広原の果てに一本の大樹を認めた。疲労を自覚していた私達は、そこで暫し休息をとることに決めた。樹の根本に腰を下ろし、水筒の水をジオと分け合う。汗ばんだ肌を撫でる風が心地良い。

急にジオが唸り声を上げだした。気がつくやうに、前方から一匹の獣がこちらへ近づいてきていた。見たことのない動物だった。外見は犬のようだが、前脚からは羽根にも似た長い毛が生えていて、体はジオの三倍ほどもある。

獣が飛びかかってきた。私は身を伏せ、ジオは果敢にも獣に応戦した。しかし大人と子供ほどの体格差である。ジオはたちまち圧倒され、獣に組み伏せられてしまった。

私はジオに樹に登るよう合図を送った。獣は犬だから樹に登れないし、私のことが目に入っていない様子なので、彼さえ樹上に避難すればこの危機を回避できると判断したのだ。

命令通りジオは樹に登った。安堵したのも束の間、私は驚嘆した。獣が難無く樹を駆け上ったのである。逃げ場を無くしたジオは、無惨にも獣に食い殺されてしまった。

大切な相棒を殺されて黙ってなどいられない。バックパックから取り出したナイフを握りしめて立ち上がる。逃げ場がないのは獣も同じ。降りてきた所を叩きのめしてやる。

だが次の瞬間、獣は前肢を広げると、ムササビのように空へ飛び

立っていった。獣は樹に登れるだけでなく、飛行まで出来たのだ。

呆然と立ち尽くす私の胸中には、深い喪失感と、「未知」に対する畏怖の念とが混在していた。

ニコライ島の食文化

皆さん、こんにちは！ 見てください、この見渡す限り広がる砂の世界！

皆さんはここがどこか分かりますか？ 実は私、ニコライ島という島に来ているんです。

とは言っても、日本の皆さんには馴染みが薄いかもかもしれません。このニコライ島は大西洋の真ん中に浮かぶイギリスの領土で、今は原住民による自治が行われています。島全体が砂漠のため資源や食料が乏しく、長らく争いが絶えなかったそうですが、数年前に自治領となつてからは治安も安定。現在は観光産業に力を入れていて、先進各国からの旅行客を積極的に受け入れているということです。

……あつ、向こうの方に人がいますね。何やら銃を持っているようです……。とにかく、声をかけてみましょうか。

すみませーん、日本のテレビ局の者ですが。銃を持ってらっしゃいますが、何をされて……。えっ、動物の狩りを？ ……ああ、ご主人、飲食店を経営されてらっしゃるんですか。それで店で出す動物を自分で。成程。

えっ、ご馳走してくれる？ 宜しいんですか？ 有り難うございます！ ……というわけで、早速ですが、ご好意に甘えて食事をご馳走になろうと思います。では、ご主人についていきましょう。

あつ、この木造の家がそうですね。中に入ってみましょう。他のお客さんはいらっしゃらないようですが……。

食欲のそるニオイがしてきましたね。一体どんな料理が……。おつ、来ました、来ました。うわー、美味しそうな肉料理だ。しかし凄いボリュームですね、これは。何の動物の肉なんでしょうかねえ？ ……とにかく、一回食べてみましょうか。いただきます。

……あ、美味しいですね。肉も柔らかくて、クセがないですし。味は豚肉に似ているようですが……。ご主人、この料理、何て言う

動物の肉を使ってるんですか？

——えっ？

ニコライ島の食文化（後書き）

フィクションです

狂ってトウナイト

故郷やそれにまつわる事物が、メディアや著作物などにおいて取り上げられると、無性に嬉しくなるものだ。

レンタルビデオ店にアダルトビデオを借りに行くと、『狂ってトウナイト』という作品が目に残った。阿波踊りを題材にしたAVらしい。内容が気になったので、それをレンタルして、家に帰って早速見た。街中の、観客のいない閑散とした演舞場で、全裸になって阿波踊りを乱舞する複数の妙齡の女性を、どこからか現れた複数の男性が、真っ裸になって、阿波踊りを踊りながら強姦する、という内容だった。

脳髓の、機能が、壊れてる。思考伝達の、回路が、狂ってる。あなた、も、私も。

付言するならば、阿波踊りにおける男踊りは、腰を低く落として力強く手を振り動かすものだし、女踊りは、背筋を真っ直ぐに伸ばして優雅に舞い踊るものだ。全く、なつて、いない。企画した、プロデューサーは、何をやっている。どれ、私が、見本を見せてやる。

あヤットサー あヤットヤットお

あヤットサー あヤットヤットお

あヤットサーヤットサー（ヤットサーヤットサー）

あヤットサーヤットサー（ヤットサーヤットサー）

踊る阿呆に見る阿呆 同じ阿呆なら踊らにや損々

あヤットサーヤットサー（ヤットサーヤットサー）

あヤットサーヤットサー（ヤットサーヤットサー）

狂ってまーす。私はキ。ガイでえーす。

……えへへ、死にたいなあ。

どうして、そう、思ったのですか？ それは何故ならば私もあな

たも、素っ裸、だからです。

狂ってトウナイト（後書き）

徳島駅前には阿波踊り期間中だけ混雑する
これ、豆知識ね

渦

平穏な海辺の町で、五十代の男が同居する二十代の息子を殺害し、遺体を切断して海に遺棄するという、凄惨な殺人事件が発生した。

犯人はその町に住む、自営業、F。浜辺に人の頭部が打ち上げられているのを通行人が発見して通報し、県警がDNAを鑑定した結果遺体の身元が判明し、Fの犯行が発覚したのだった。

逮捕されたFは、警察の取り調べに対して、息子は数年前から精神障害を患っていて、日頃から家庭内での暴力が酷く、精神科医に診てもらったが回復の見込みがないと言われ、家族の将来を悲観して殺害に及んだ、と供述した。

裁判は、公訴事実はずれず、被告の情状面が焦点となった。

検察側は、遺体を切断した残虐性、自首しなかった点を指摘し、懲役二十年を求めた。

弁護側は、被害者の精神的な疾患が治らないことを悲観し、また日常的な暴力に耐えかねた末のやむを得ない犯行で、情状酌量の余地があるとし、懲役五年が妥当だと訴えた。

結局、弁護側の主張が認められ、被告には懲役五年の実刑判決が下された。検察側、弁護側共に控訴せず、Fは刑に服した。

五年後、出所し我が家に戻ったFが見たのは、見知らぬ若い男の腕に抱かれた妻の姿だった。妻は、殺人者の妻だと世間に白い目で見られ、疎外感に耐えきれなくなり、それを紛らわせるために仕方なく若い男性と肉体関係を結んでいたのだ、そう泣きながらに弁解した。だが激昂したFは、妻の首を絞めて殺害し、遺体を細かく切り刻んで海に捨てた。

数日後、海岸に人間の胴体が打ち上げられているのを通行人が発見し、通報した。DNA鑑定の結果、Fに犯行の疑いがかけられ、間もなく彼は殺人の容疑で逮捕された。

調べに対してFは、カッとなって首を絞めてしまったが、殺すつ

もりはなかった、などと供述し……。

こんな彼氏

交通事故に遭って頭に怪我をして以来、彼女はすっかりとおかしくなってしまった。その怪異な行動のバリエーションは多岐に渡るので、どうにも説明しづらい。

「狂ってまーす。私は。チガイでえーす」

例えば、突然躁状態になって奇声を発する。

「……えへへ、死にたいなあ」

そうかと思えば、スイッチが切り替わったように鬱状態になって、真に迫った顔で自殺願望を口にしたりする。要するに、情緒不安定なのだ。

この極端な躁鬱状態の詳しい原因は分かっていない。原因が不明ということとは、対策を打てないということだ。事故に遭って以来、彼女はずっとこの症状に苦しみ続けている。

彼女が事故に遭った際、僕は彼女の隣を歩いていて、前方から迫る大型トラックが視界に入った時、僕は咄嗟に身を挺して彼女を守ることも出来たはずだ。それなのに僕は何も出来なかった……。

事故から守ってやれず、回復の手助けすら出来ない。こんなダメな彼氏でゴメン――。

そんな思いが今も胸の内側にこびりついている。その罪悪感が、自宅で療養している彼女の許へと足を向かわせる。

部屋に入ると、彼女は虚ろな瞳でベッドに横になっていた。声を掛けると、彼女は突如として跳ね起き、衣服を脱ぎ捨てて全裸になって、奇妙な踊りを舞い始めた。

「踊る阿呆に見る阿呆。同じ阿呆なら踊らにや損々。あヤットサーヤットサー」

踊る阿呆に……という囃子詞から判断するに、阿波踊りなのだろう。しかしその踊りは、ただ跳躍を繰り返しながら出鱈目に両手を振るというもので、阿波踊りとはまるで別物だ。

狂ったように彼女は飛び跳ねている。そのたびに剥き出しの大振りの乳房が激しく弾む。

彼氏として何もしてやれない僕は、彼女のそんな様子を呆然と見詰めながら、パンツの下ペニスを勃起させていた。

六月

「六月ってウザくね？」

「は？ 六月？」

「そ。六月」

「えっ？ 何で？」

「だってさあ、六月って祝日がないんだよ？ 八月もそうだけど、アレは夏休みとかあるから関係ないでしょ。六月だけ土日以外に休みの日がないの、六月だけ。それってウザくね？ てゆーかキモくね？」

「あー……。それは確かにウザいしキモいかも」

「でしょ？ 何がジューンブライドだっつー話だよ。由来があるんだかないんだか知らないけど、無理矢理こじつけてんじゃねーよって思わね？」

「うん、思う思う。別に六月である必要は特にないよね」

「だよーね。それに六月って、雨とかいっぱい降るじゃん？ 梅雨、ウザくね？」

「あー、ウザいウザい。梅雨はウザいよねー、マジで」

「ジメジメしてるし最悪だよーね。何まとまって降ってんだよって話だよ、ジメジメと。キモいっつーの」

「ホントホント。キモいよねー、梅雨」

「こう考えてみるとさあ、六月ってホントウザくね？ いや、マジでウザいわ、六月。てゆーかいいところとか全然なくね？ 探しても思い当たらないもん」

「確かに……。いいところないよね、六月」

「六月なんてクソだよ、実際。てゆーか六月って存在してる価値あんの？ 一年に一回来る意味あんの？」

「あー、それは……」

「何？ 何かあんの？ 存在価値」

「いや……六月、あたしの誕生日あるから。二十二日に……」

「……」

「……何かゴメン」

悔恨

「何であんなことをやったのか……。今は心底後悔してるよ。もしタイムマシンがあつたなら、それをする直前の自分に会って、そんなバカな真似は絶対にするなって忠告してやりたいね」

ある二十代半ばの中間層の夫婦の間に生まれた、五歳になる純真無垢な一人娘を拉致し、衣服を切り刻んで裸にし、泣き出した彼女の顔を腫れ上がるまで殴打し、唾を吐きかけ、有らん限りの悪罵を浴びせ、フェラチオを強要し、未発達の性器を遊び、失禁した罰と称して再度暴行を加え、強姦し、金属製の棒を膣に深く突き入れて子宮を破損させ、後ろ手に縛り上げ、何百回と鞭打ち、熱湯を浴びせかけ、電気ショックを与え、泡を吹いて失神した彼女の姿を見て腹を抱えて笑い転げ、水の張った水槽に何度も顔を突っ込んで強制的に意識を覚醒させ、電気コードで首を締め上げて気絶させ、肛門を犯し、浣腸を使って脱糞させ、糞便を無理矢理食べさせ、顔面に硫酸をかけ、両手足の生爪を剥がし、歯を一本ずつ全て抜き取り、ドライバーを耳の穴に突っ込んで鼓膜を破り、ナイフで両耳を削ぎ落とし、目玉を抉り出し、全身をメッタ刺しにして死に至らしめ、死姦し、電動ノコギリで遺体を三十六等分に切断し、その内の頭部を、剥いだ二十枚の爪、陵辱と拷問の一部始終を録画したDVD、そして極めて挑発的な内容の自筆の挑戦状と共にダンボール箱に梱包し、それを被害者の自宅に送付して逮捕されたその男は、警察の取り調べに対してこのように答えた。

「被害者の家に遺体の一部を送り付けるなんて、何であんな余計なことをしたんだろうな。我ながら疑問だね。殺して遺体を捨てるだけなら足が付くこともなかったろうに……。この失敗にはほとほと懲りたね。もし出所したとしても、もう二度とあんなバカな真似はしないよ」

その後、男は十数件の幼女殺害を自供した。

真夏のカルピス（前書き）

カルピスが美味しい季節になりましたね

真夏のカルピス

「喉乾いたから、飲み物もらっていい？」

ゲーム機のコントローラーを置いたあたしは、隣に座る恋人の隆哉に向かって訊いた。隆哉はあたしを一瞥し、「いいよ」と無愛想に答えて、すぐにテレビ画面に視線を戻した。

「冷蔵庫、開けるよ？」

「勝手にどうぞ……」

隆哉は画面を見詰めたまま返事をした。後ろ姿からでもゲームに夢中になっていることがハッキリと分かる。

隆哉はゲームをするのが好きだ。あたしも好きは好きだけど、大人数でワイワイとやるから楽しいと思うのであって、隆哉のように一人でプレイすることには興味が持てない。個人の差といえばそれまでなのだろうけど、ちょっと共感できない部分でもある。

冷蔵庫を開けると、一本の瓶が目に残った。何の変哲もないガラス瓶の中に、白い液体が容量の四分の一ほど入っている。見た目はカルピスに似ていた。他にも飲み物は置かれてあったが、その瓶を手に取ってみる。

蓋を開けると、生臭い二オイがした。飲料水ではないのかとも一瞬思ったが、冷蔵庫を開けると宣言した時に隆哉からの忠告が何もなかったということは、飲んでも問題はないということなのだろう。液体をガラスコップに注ぎ、喉へ流し込んだ。

率直な感想を言えば、とても美味しかった。味はカルピスとは全然違っていただけれど、濃厚な味わいと、トロツとした喉越しがいい。喉が乾いていたこともあって、瓶の中身を全て飲んでしまった。

「ごめん。これ、全部飲んじゃった」

空き瓶をかざして報告すると、隆哉はすぐにゲームを中断し、こちらに歩み寄った。

「じゃあ、補充しておかないとね」

隆哉は戸棚から一冊のアダルト雑誌を取り出し、下半身を露出して亀頭を瓶の口に宛がうと、裸の女性の写真を一心に見詰めながらペニスをしごき始めた。

真夏のカルピス（後書き）

カルピスが美味しい季節になりましたね

例えばこの教室で銃乱射事件が起こったとして……

大学の一室で考えた。眠たい講義を聞き流しながら考えた。例えばこの講義室に男が乱入し、銃を乱射し始めたとしたら、果たしてどう行動するのが正解なのだろうか――と。

銃が極めて殺傷力の高い凶器だということは、三流私大生の俺でも知っているし、理解できる。高速で射出される銃弾は、どのように備えていたとしても対処することは難しいだろう。銃口を向けられた時点で命はないものと覚悟しておくべきだ。

避けるのが無理なら、逃げるか、隠れるか。前者の場合、この教室で考えると、出口は窓か、二つある出入り口のどちらかだ。ここは四階だから、窓からという選択肢は自動的に消える。犯人は出入り口の一つを塞いでいるわけだから、実質脱出口は一つ。そこから外に出るにしても、位置的に考えて、犯人に狙い撃ちされる危険性が高いのではないか。

そういうことであれば、隠れるなり死んだフリをするなりしてやり過ごす方がベターかもしれない。もっとも、犯人が倒れている人間に一タトドメを刺して回るような執拗な性格なら元も子もないが、少なくとも自分から銃口の前に身を晒すよりは遥かにマシだろう。

――と、そこまで考えたところで、日本は銃社会ではないから銃乱射事件が起こる可能性は極めて低い、ということに不意に気がついた。その途端、真剣に考察していた自分がアホらしくなった。溜息を吐き出して席を立ち、講師の制止の言葉を無視して教室を出た。廊下を歩いていると、迷彩柄の服を着て、モデルガンを携帯している男とすれ違った。演劇学科の学生だと思って気に留めなかったが、そうではないような気もした。

突然、悲鳴が起こった。振り返ると、今さっき俺が出てきた教室の前に、あの迷彩服の男が立っていた。ドアを開け、模造の銃の銃口を室内に向けている。何をするつもりだろうと首を傾げた次の瞬間

間、耳をつんざくような銃声、銃声、銃声、銃声、銃声、銃声、銃声――。

刹那の悪罵

暑い昼下がりであった。山間の県道を歩いていた青年は、上着を脱ぎ、と足を止めた。

そこへ前方から路線バスが走ってきた。青年は道の端に移動し、バスを見るともなしに見ながら上着を脱いだ。

すると突然、バスが道の真ん中で停車した。そこに停留所はなかった。青年は驚いてバスを見返した。昇降口のドアが開かれたらしい音がしたが、青年の位置からは車体が邪魔になって様子が分からない。間もなくドアが閉まる音がして、バスは何事もなかったかのように走り去っていった。

バスから降りたのだろう、若い女性がうずくまっていた。一糸纏わぬ姿である。先程のバスの不自然な動きと照合すれば、何らかの問題が発生したと考えるのが妥当な状況だった。歩み寄り、恐る恐る声をかける。

女性は泣いていた。泣きじゃくっていると形容してもいいかもしれない。懇願するような眼差しが青年を見上げた。その瞳は、無償の慈愛を欲しているようでも、ただ単に衣服を求めているだけのようでもあった。ただその視線だけが青年へと語りかけていた。

やがて青年は、女性の頭髮に精液が付着しているのを認めた。彼は女性の身に起こった事情を察した。青年は口を開いた。

「AVの撮影だからって、演技してまで不幸ぶってんじゃない。目障りなんだよ」

女性は絶句した。青年は目を背けて上着を肩に担ぎ、その場から立ち去った。

実際に青年が導き出した推断の結論は、口にした内容とは異なるものだった。しかし彼は、女性のその被虐的な姿に加虐心を煽られた結果、つい本心でもない悪罵を発してしまったのだった。

山道を歩きながら、さっきの女はきつと自殺するだろうな、と青

年は思った。しかし彼女に対する同情心や、それを誘発したかもしれない発言を行ったことに対する後悔の念は、一切浮かんでこなかった。

優しさと風船

それは、ある平穏な田舎町の、静かな夕刻の出来事でした。

散歩をするのに適したとある小道を一人歩いていた青年は、その中途にある一休みするのによく使われている大樹を、母と娘と思しき二人の女が見上げている姿を見かけました。母親はうら若く、娘は五歳くらい。二人とも見惚れるようなブロンドヘアをしています。親子が何を見ているのか気になった青年は、二人の視線を辿りました。すると地上から十メートルほどの枝先に、真っ赤な風船が引っかかっていた。何かの弾みで娘の手から風船が離れて、枝に絡まってしまったのでしょうか。

「風船を手放してしまって、枝に引っかかってしまったのですか。それは災難ですね」

青年は親子に声をかけました。すると母親は静かに首を横に振りました。

「いいえ、あれは娘のものではありません。引っかかっているのを偶然見つけたのです。娘が可哀相だと言うものだから、何とか出来ないかと思っただけなんです……」

哀れな身上の風船を友人のこのように心配する娘の純真な慈悲心に、青年は深い感銘を受けました。ですからそのお礼に、娘にその風船をプレゼントしようと考えました。

「でしたら、僕が風船を助けましょう」

青年はそう言うや否や、太い幹に手をかけて樹に上りはじめました。幸い程良い高さに手足をかけるべき枝が伸びていたこともあり、無事に目的の高さまで上ることが出来ました。

風船が引っかかっている枝は太く、青年が乗っても折れそうにありません。青年は腹ばいの姿勢で慎重に枝先へ向かい、十分な距離まで近付いたところで手を差し伸ばしました。

しかし青年の指先が触れた瞬間、風船は突如閃光を発したかと思

うと爆発し、彼の右手を跡形もなく吹き飛ばしました。

それは太平洋戦争只中の、アメリカのある平穏な田舎町の、静かな夕刻の出来事でした。

にゃあ

桃子が住む地域が梅雨入りをしたその夜、彼女が飼っていた愛猫のぴいちが失踪した。

ぴいちは酷く無愛想で、餌の時間になっても「にゃあ」とも鳴かず、飼い主の方を見向きすらないという猫である。今まで一日や二日家を空けることは何度もあったが、今回はもう五日も姿を見えない。桃子は懸命に彼女を探したが、成果は上がらなかった。

翌日の朝、見知らぬ電話番号から電話がかかってきた。受話器の向こう側の若い女性は、桃色の首輪をしたメスの黒猫を保護している旨を伝えてきた。伝えられた特徴から判じて、その猫はぴいちに相違なかった。

女性に話によると、数日前から家の軒下にぴいちが来るようになったのだそうだ。初めはそこで休んでいるだけかと考えていたが、どうやら弱っているらしいので、飼い主に連絡するべきだと判断したらしい。そこで一時的に保護した上で、首輪に書かれていた電話番号に電話をした、という経緯だったようだ。

桃子はひとまず安堵し、仕事が終わったらすぐに引き取りに行く」と女性に伝えた。

夕方、約束通り女性の家を訪れると、女性が青い顔をして現れた。ぴいちが家から逃げ出してしまい、まだ戻ってきていないのだという。二人は協力して周囲を搜索したが、ぴいちは見つからなかった。桃子は肩を落として女性宅を後にした。

猫は己の死期を悟ると、人前から姿を消す。衰弱していたというし、ぴいちがいなくなった原因はそれかもしれない。

また一日が過ぎた。会社から帰宅した桃子は、玄関先に腰を下ろしぼんやりと景色を見ていた。ぴいちがひよっこりと帰ってきてくれたらどんなにいいだろう、そう考えながら。

不意に気配を感じて顔を上げると、一匹の黒猫が弱々しい足取り

でこちらに歩いてきていた。その首には桃色の首輪が巻かれている。
ぴいちは桃子の足許にすり寄ると、彼女を見上げて「にゃあ」と
一声鳴いた。

ある放課後

私の名前は畑山沙織。自他共に認めるクラス一の美人。2―Aの高嶺の華だ。

そんな私だけど、今、大変な危機に直面している。単刀直入に言えば、おならがしたい。一人きりの時なら憚ることもないのだろうけど、今は日直の仕事を片付けるため教室に居残っている最中なのだ。もう一人の日直である山崎くんと一緒に……。

トイレに行き、秘密裏に事を済ませるのが最も無難な解決策なのだろう。しかし現状、肛門括約筋に何らかの刺激が加わっただけでも、その弾みでガスが外に抜け出てしまうというような有り様だ。今の状態では歩くことすら自殺行為に等しい。

こうなれば覚悟を決める必要があるだろう。――そう、この場でおならをする、と。

山崎くんは今、窓際で床の掃き掃除をしている。窓は開け放たれていて、強めの風が室内に吹き込んでいる。そして私が立っているのは風下である出入り口の近く……。要するに無音でしさえすれば、私が放屁した事実を彼に悟られずに済むということだ。――これを不幸中の幸いと呼ばずして何と呼ぼうか！

山崎くんは依然として窓際で作業を続けている。今が絶好のチャンスだ。

まずは全身の力を抜いて、リラックス、リラックス。そして肛門の締めつけを慎重に緩めて、あくまで力まずに、優しく解き放つてやるイメージでガスを外に……。

――ポプウーッ！

恥じらいもクソもない、下品極まる音色が教室に響き渡った。打って変わって空間に静寂が満ちる。山崎くんが顔をぎこちなくこち

らに向け、視界にあたしの姿を捉えると同時に表情を凍りつかせた。
——私の名前は畑山沙織。自他共に認めるクラス一番の美人だ
ど、たった今、山崎くんにとっての高嶺の華ではなくなりました。

乳房遊戯

灰色のスポーツブラに水色のショーツという恰好で、リビングのソファに寝そべって晩夏の午後を持て余していると、真つ赤なランジェリーを身に着けた妹が鼻歌を歌いながら現れた。夏だというのに、二人揃って下着姿で退屈を謳歌しているとは、何という姉妹だろう。しかしセクシーな下着というのは、「下着」ではなく「ランジェリー」と呼びたくなるから不思議だ。

私の姿を認めると、妹は意地悪い笑みを唇に浮かべ、その場でジャンプをし始めた。口では「ばいんばいん」などと言っている。乳が揺れる際の擬音だろう。飛び跳ねる動きに伴って妹の乳が激しく上下している。二つのバレーボールは今にもブラのカップからこぼれんばかりだ。妹は、巨乳である。

妹は擬音語と跳躍を繰り返しながら、私の目の前まで来た。そして両手で自分の乳を真ん中に寄せて、ケータイが充分に収納できるほどの谷間を拵えた上で、「おっぱい相撲だ、はっけよい、のこつた」などと意味不明な言葉を吐きながら、それを私の胸元へと押しつけてきた。煩わしい。誰かがつぷり四つで組み合うか、バカ。

暑苦しいことこの上ないので、拳を突き出して乳を押し返した。すると妹は「ああん」という妙な声を発して床に尻餅をついた。乳をちよつと触られたくらいで大袈裟な。鬱陶しいったりやありやしない。

妹は「やったなあゝ」などと筋違いの怨恨の言葉を呟きながら、ブラを乳の上までずらした。そうして露出した乳首をそれぞれ指先でつまんで、「ちくびいゝむ」と叫んだ。こちらに向けて架空の光線を発射したつもりらしい。しかも「ちゅどーんゝ」などと口走って、その光線が私に着弾したことに勝手にしている。馬鹿馬鹿しいので、私は「乳癌に罹れ」と悪態をついて、寝返りを打って妹に背を向けた。

私は、貧乳である。

第三志望のピエロ

会場は大入り満員だった。ホール中央にある、中州のように孤立したステージの上で、コメディアンが独り、マイクを片手にジョークを叫んでいる。

「隣の家の庭に新しい塀が出来たんだってね。へえー」

観客席から笑声は上がらない。ある者は大きな欠伸をこれ見よがしにする。ある者は意味が分からないというように首を傾げる。

「新しい柵も作ったんだって？ それは傑作だ」

観客席は静まり返っている。ある者は呆れたように頭を掻く。ある者は幻滅したというように冷めた溜息を吐き出す。

「それから屋根をまた新しくしたそうだよ。やーねー」

観客の口からは失笑すら零れない。ある者はつまらなさそうに指先を見つめている。ある者は退屈そうに周囲を見回している。

コメディアンは次なるジョークを繰り出そうと唇が蠢かせたが、声は出てこなかった。顔は紅潮している。マイクを持つ右手は激しく震えている。

コメディアンはいきなりマイクを床に叩きつけた。そしてホールの二階席まで響く大声で叫んだ。

「殺せよ！ いっそ殺してくれよ！ お・ね・が・い・し・ま・す・か・ら！」

観客は何も答えない。ただ冷ややかな眼差しを彼に注ぐばかりである。

コメディアンは赤いままの顔に達観したような色を浮かべると、後ろ歩きをして舞台裏へと消えていった。

数日後、コメディアンの死体がアパートの自室で発見された。死因は自殺だった。警察の聴取に対し彼のマネージャーが語ったところによると、彼は自殺する前夜、すべり芸をウリにした芸風に転向

しよつというマネージャーからの提案を頑なに拒否したそうである。

腸詰めの地獄

我が家の食卓で異常事態が発生している。

——ウインナー。隠喻でも何でもなく、ウインナー。ウから始まりナーで終わるあの加工食品に、献立が蹂躪されているのである。

最初は、最近よくウインナーが出てくるなあ、くらいの感覚だった。割合で言えば、二日に一回、三食のうちのいずれかにウインナーを使用した料理が登場する、程度のことだったと思う。それが毎日皿に並ぶようになって、何かおかしいと思い始めた。やがて主菜がウインナーのみになった時は、これはただ事ではないと危機感を覚えた。

毎日三回も食事を作っているのだから、出来合いのものを登板させて楽をしたい気分が続く時だって偶にはあるだろう。そう思っただけで嵐が収まるのを待ったが、期待に反して攻勢は次第にエスカレートしていった。そして今や、ソテーされたウインナーの上に微塵切りにされたウインナーがかかった料理が公然と食卓に並べられるという有り様である。

我慢は最早限界だった。しかし食事の面以外では実によくしてくれる妻を直接的に叱責することが躊躇われた私は、この異常事態の原因を努めて、それを取り除くことで直面している問題を解決しようと考えた。

私の見立てでは、冷蔵庫が怪しかった。妻は、キッチンを自分のプライベートルームの一つと考えている節があり、私といえどもみだりに中を開けることを禁ずるのである。何が原因なのかは予想もつかないが、食品に関連することであるからして、きっとそこに何らかの手懸かりが隠されているに違いない。

冷蔵庫は飲み物をとる際に毎日見ているが、特に不審なものはない。怪しいのは普段全く見ることのない野菜室だ。

野菜室は一番下の段。一思いに引き開ける。

「Oh……」

私は思わず声を洩らしていた。

その冷え切った箱の中で、ボイルされた娘のスーザンが膝を抱えて座っていたのである。

リア充爆破装置

畳敷きの和室の中央に、丸メガネをかけた冴えない風貌の青年が寝転んでいる。

「職を探しても見つからないし、恋人が欲しいけど出来ないし……。あーあ、地球上のリア充、一人残らず爆発しないかな」

青年がそう呟いた時、勉強机の引き出しが開き、水色の狸のような生物が現れた。狸は寝転がる青年の姿を認めて、溜息をついた。

「今日も職安に行かず一日中昼寝か。本当にダメ人間だねえ、媚び太くんは」

「そんなことより法螺えもん、リア充を爆発させる道具とか、ない？」

「あることはあるけど……」

法螺えもんは腹のポケットをまさぐったのち、その手を高々と掲げた。

「『リア充爆破装置』いゝ」

濁声で道具名を述べた彼の手には、ボタンのついた板切れが握られている。

「この『リア充爆破装置』のボタンを押すと、半径百メートル以内にいるリア充が赤く光り、数秒後に爆発してしまうんだ」

「それはいいや。早速試してみよう」

媚び太は『リア充爆破装置』のボタンを押した。すると媚び太の体が赤く光り出した。

「えっ、ちよっ、何で僕が？ 法螺えもん、爆発を止めてよ！」

「一度ボタンを押したらもう無理だよ」

今際になって媚び太は、自分がリア充であることを悟った。職や恋人がなくても、戦争や貧困の絶えない国の人々から見れば、自分は遙に恵まれた境遇の人間なのだと……。

媚び太の爆死後、法螺えもんは『リア充爆破装置』購入先の「お

お客様相談窓口」に電話をかけた。リア充でないはずの者が爆発したのはなぜ？ 担当者の答えはこうだった。

「もしかしてお客様の『リア充爆破装置』の商品番号は『○―□』から始まりませんか？ 今当社では、その番号の『リア充爆破装置』を回収しているのです。つまり、お客様がお持ちのそれは、欠陥品です。」

晩秋のイタズラ心

本日初めて顔を合わせた若い二人の男女が、晩秋の寒空のもと同じベンチに腰を下ろして、仲良く焼き芋を頬張る。これは世にあまりないことである。

焼き芋を食べようと言いだしたのは、女だった。話しかけたのも女の方からである。一人ベンチに座って暇を持て余していた男に、「寒いので一緒に焼き芋でも食べませんか」と女が声をかけたのである。公園の隅には焼き芋屋の屋台が停まっていた。男は多少困惑したが、申し出を拒む理由も特になかったので、「いいですよ」と応じた。

焼き芋屋に焼き芋を購入しに行ったのも女だった。二人分の代金を出したのも女だった。男の割り勘の申し出を女が断ったのである。余程焼き芋が好きなんだな。男はそう思いながら、焼き芋を買う女の後ろ姿を見ていた。

二人は同じベンチに腰掛けて、黙々と焼き芋を食べた。女が、食べたそうにしていた割にあまり美味しそうに食べていなかったのが、男には印象に残った。

そのあと二人は公園内をアテもなく散歩した。そしてどちらが言い出すでもなくラブホテルに入った。今日会ったばかりの男女が体を交える。これは世に多々あることである。

「ねえ、お尻の穴、舐めて。あたし、そうされるのが好きなの」

四つん這いになった女がベッドの上で要求した。夜を共にした相手が思わぬ性的嗜好を有していた。これも世に多々あることである。男は他人のアナルを舐めた経験は一度もなかった。しかしアダルトビデオでそういうシーンを何度か目にしたことがあるので、その行為は一般的なもののだと解釈した。

男は女のお尻の膨らみを両手で掴んで左右に広げ、お尻の穴に顔を近づけ、舌を突き出した。

その瞬間、すばまっていた肛門が開いたかと思うと、豪快な放屁音が部屋に響き渡った。腸内で熟成されたような濃厚な硫化水素の臭いが、男の鼻孔に雪崩れ込んだ。

初冬の夜に

季節は秋を忘れて、冬を先に届けてしまったらしい。

外出するのが億劫に感じるほど寒い一日だ。眠る時は毛布を何重にも被ってじっとしていればいいが、起きている時はそうはいかない。重ね着をするにも限界がある。纏うのも過ぎれば身動きがとれなくなるだけだ。だからといって服装を軽くすれば、寒さが体力を容赦なく奪っていく。冬は、面倒だ。

そもそも私が寒さに悩まされているのは、家のエアコンが壊れてしまったからだ。我が家に暖房器具はそれしかないから、実に不便を被っている。修理業者に電話をしてはいるのだが、「今からこちらに向かいます」という電話がかかってきたきり連絡がない。

寒さと侘びしさを紛らわすために、愛用のコーヒークップに温かいコーヒーを注ぐ。それを少しずつ口にして、凍える時間をやり過ごす。褐色の水面に向けて吹きかけた白い吐息を目視しながら。味わいなれた苦みを自己の身の上に重ね合わせながら。

不意に玄関のチャイムが鳴った。応対に出ると、修理業者の男が愛想のいい笑みを浮かべて立っていた。靴に濡れた落ち葉が付着しているのが目に留まる。そういえば外は雨模様だった。

だから、今日は一段と寒かったのか。

寒さに気を取られて今までそのことに気付かなかった自分が、急に馬鹿らしくなった。

だったら、家までやって来たこの業者さんは、さぞ寒い思いをしただろうな。いや、車で来たのだから、そうでもないのかな。

そんなことを取り留めもなく考える自分が、我ながらおかしかった。

修理の結果、エアコンは無事に正常に復した。

業者を見送り、暖房の効いた部屋に戻り、数十分ぶりにコーヒーに口をつける。コーヒーはすっかり冷めていたが、そのことを問題

にしない私がそれを一気に飲み干した。

ニートと勇者

俺がニートになると同時にこの世界を掌握した魔王は、圧政を敷いて民を酷く苦しめた。

苦しくなる家計、されど働こうとしない俺。困り果てた家族は、起死回生、一石二鳥の打開案を俺に呈した。それは、俺に魔王討伐を任せる、というものだった。

働けとやかましい親に日頃から参っていた俺にとって、その提案は渡りに船だった。だからと言って、危険を犯してまで魔王を倒しに行く気など毛頭ない。親から得た軍資金を使って各地で遊び回る計画だった。

しかしある街で暴漢に襲われた俺は、自分でも驚くほど鮮やかな太刀捌きでその男を撃退した。その瞬間、俺は自分に剣術の才能があることを悟った。

これを活かそうと、己の実力を量る意味も込めて、俺は手頃な賞金首に戦いを挑んだ。結果は見事な勝利だった。これに味をしめた俺は、悪人どもと次々に戦った。勝利の数と得た賞金の額がどんどん増えていった。自然と剣術の腕に対する自信も深まっていった。

このことが繰り返されていくうちに、俺の名前と実力は世間に広く知れ渡っていった。俺に妥当魔王を望む声さえ聞かれるようになった。俺を疎ましがる人間など最早どこにもいなかった。

そして俺は、ついに、魔王の城を訪れた。

「貴様の悪行もここまでだ。覚悟！」

俺は剣を振りかざし魔王へと迫った。魔王は鼻で笑うような仕草を見せると、掌上に巨大な火球を創り上げ、俺に向かって放った。本能と経験が、避けられないと瞬時に悟った。

上には上がいたのだ。小悪党ばかり倒して有頂天になっていた自分が馬鹿らしい。こんなことだったら、親から白い目で見られても少々生活が苦しくても、図太く家でニートをやっていればよかった

のに――。

心の底からそう思った次の瞬間、俺は紅蓮の炎に身を焼かれ、魔王の七万八千六百十三人目の犠牲者となった。

芸は身を助く

アルバイトや派遣社員も参加しての会社の飲み会が市内の某居酒屋で催された。

「じゃあ私、レイプされる筆談ホステスのモノマネやりまあす」

高らかに宣言したのは派遣社員の高木歩美さんだ。現在二十歳と花盛りの高木さんは、男受けする端麗な容姿と、ちよつとドジで守つてあげたくなる性格とで、仕事の評判はイマイチだけど社内の男性陣からは人気が高い女の子だ。その高木さんの口から、まさかレイプなどという物騒な単語が出てくるとは……。すっかり酔いの回つた周りの連中も流石に面食らつたらしく、すっかり黙り込んでしまった。ただ一人、僕の同期の井場だけが、待つてましたとばかりに拍手を打ち鳴らした。

それに応えるように高木さんは立ち上がると、顎を思い切りしゃくり上げて白目を剥いた。僕はジョッキを手にしたまま息を呑んだ。「あうあうあー」

彼女は取り乱したように両手を闇雲に振り、判別不明の呻き声を上げた。同期の井場が吹き出した。

「はーっ、ううっー、あうー、うあえー」

彼女は酸欠の金魚のように口をぱくつかせる。同期の井場はアホみたいに笑っている。

「うえあ、うあ、うあうー、あぐうーっ」

彼女は狂つたように頭を激しく上下させる。同期の井場は笑いつぎて涙目になっている。

高木さんはテーブルにあった割り箸の袋を手にとると、それに「これで終わります」と書いてみんなに見せびらかし、着席した。同期の井場のみから熱い拍手が送られる。僕は首を傾げ、静かにジョッキに口をつけた。

数日後、僕は同期の井場から、高木さんが正社員に昇格したと聞かされた。あの一発芸が受けたのかと思ったが、井場曰く、彼女はどうかやらず上司に色仕掛けをして、それが奏功したらしい。あの高木さんがそんなことをするなんて……。人は見かけによらないものだ。

聖夜の行列

クリスマスイブの夜、近所にある美味いと評判のケーキ屋を訪れると、店の前には長蛇の列が出来ていた。列をなしているのは、最後尾に並ぶ男を除けば若い女ばかりである。

列に並んですぐ、前の男の様子がおかしいことに気がついた。やけに激しく貧乏揺すりをしているのである。さらにはその前の女も妙だ。なぜか爪立って、尻を突き出すような姿勢で立っているのである。

不審に思っただけで覗き込むと、二人はなんと性交をしていた。手持ち無沙汰にかこつけての情交かと思っただけが、違う。女の恐怖と苦痛の表情から判ずるに、男が女を犯しているのだ。

その蛮行を即刻止めさせようと思っただけで、躊躇った。警察を呼び、男を引き渡す際、事情を訊くために署に同行を求められれば、必然的にこの列から離れなければならない、ケーキを購入するためには長蛇の列にまた一から並ぶ必要が出てくる、と考えたからだ。他の客も強姦自体には気がついていないものの、その可能性を怖れて行動できずにいるのだろう。そして強姦された女は、最早列に並び続ける氣力を失うに相違ない。それに伴って自分の順番が一つ早くなる。従って、前に並ぶ女を犯すことを繰り返していけば、犯した女の数だけ自分の番が訪れるのを早められる計算となる。このことまで考慮に入れて強姦に及んだのかと思うと、男の悪魔的な頭脳に畏敬の念を払わずにはいられなかった。

間もなく強姦が終わった。女は泣きじゃくっていたが、しかし着衣の乱れを簡単に直しただけで、依然として列に並び続けた。逆に男の方がすぐごと列から離れていった。男の思惑が外れた結果になったのか、それとも端から強姦だけが目的だったのか、それは定かではない。確かなのは、ケーキ一つのために長蛇の列に並ぶことから分かるように、女の精神力は強靱である、ということだけだ。

やがて順番が来て、ケーキを購入した。
ケーキの味は、美味くも不味くもなかった。

告白

冬にしては温かい十二月初旬のある放課後、山田悠介は湊叶絵を旧校舎の裏に呼び出していた。

向き合うが目を合わせられない二人。漂う独特の緊張感。こんな状況で男子生徒が女子生徒にすることといえば、一つしかない。

「湊さんのことが好きです！俺の恋人として、一緒に夜行観覧車に乗ってください！」

「ごめんなさい！」

叶絵が勢い良く頭を下げたのは、悠介が己の本心を伝え終えたと同時に出来事だった。悠介は口をあんぐりと開けたまま固まってしまった。彼の視界は今きつとブラックアウトしているに違いない。

「……どうして？」

「私は別に山田くんのこと好きじゃないし、それに他に好きな男子がいるから。……それじゃあ」

素っ気なく言い捨てて叶絵は去っていく。その背中を悠介の怒声と呼び止めた。振り返った叶絵が見たのは、顔を怒気に紅潮させた悠介の姿だった。

「上から目線で言ってるじゃねえよ、このブス！何様だ、こら！」

俺と同じ毎朝クソしてる身分のくせに、一丁前に見下してんじゃねえよ！なんだ、その偉そうな口は！——謝れ！謝れよ！

ほら早くう！」

その言葉に、叶絵は頬を赤らめると、上目遣いに悠介を睨みつけ、苦々しげに呟いた。

「いや、私、今便秘だし」

場が凍りついたかのように静まり返った。長い沈黙のあと、悠介は小声で「なんか、ごめん」と囁き、逃げるようにその場から去っていった。

その夜、悠介は布団の中で、失恋した事実を噛み締め、泣いた。そしてひとしきり涙したあと、なかなか出ない大便を懸命に排泄しようとしている叶絵の艶姿を想像して、オナニーをした。

苦言

デパートメント・ストア

とある百貨店のエレベーターに、全身黒づくめの男が足を踏み入れた。箱の中に他に利用者はいない。操作パネルの前に控えめに佇むエレベーターガールの岬が、ただ一言「何階ですか」と事務的に訊ねたばかりである。

男は眉根を寄せて岬の顔を見て、一拍の間を置いて「十三階」とぶつきらぼうに行き先を告げ、彼女から見て対角の位置にあたる角にもたれた。白い手袋に包まれた岬の指先が最小限の動きで必要なボタンを押す。扉が閉まり、二人を載せた箱が上昇を始めた。

エレベーターが動き出してすぐ、岬は背中に視線を感じた。箱の中には自分を含めて二人しかいないのだから、送り主の正体は知れている。同乗している黒服の男である。

箱の両側面には鏡が貼りつけられている。岬は視線をさりげなく鏡に向け、それを介して男の姿を見た。男は岬が最後に確認したのと同様の姿勢で壁にもたれている。ただしその双眸は無遠慮に岬の後ろ姿を凝視していた。

岬は緊張と恐怖とを覚えた。密室という状況を利用して、男が自分に対して何らかの好ましかからざる行為を働くのでは、と邪推した。しかし、鏡に映る男は身動き一つしない。

エレベーターが中途のフロアで呼び止められることはなかった。

二人を載せた箱は異様な緊張感を保ったまま上昇を続けた。

目的の十三階に着いた。職務上の義務から、岬はその旨を口にした。男が壁から背中を離し、歩き始めたのが鏡越しに見えた。

男は岬の背後で足を止めた。岬はやや引きつった業務用の笑顔を男に向ける。男が口を開いた。

「あんた、さつきから口、すっげえ臭いんだけど。ブレスケア、した方がいいよ」

箱から男が去り、扉が閉まる。

岬は、鼻と口を両手で覆い、そこに吹きかけた息を鼻で吸い込んでみた。しかしそれだけでは客観的に自身の口臭の有害性の有無を判断しかねて、彼女は無性に泣きたくなった。

美人の見栄

備えつけのクーラーが故障して、七月中旬の1―Aの教室は地獄絵図と化していた。クラスみんなはおしなべて辛そうな顔をしている。古典教師の藪木は、禿げ上がった額に滲む汗をしきりにハンカチで拭っている。教室はノートや教科書を団扇代わりに扇ぐ音で蔓延していた。

「先生、少し宜しくて？」

そんな中、おもむろに挙手して藪木を呼んだ者がいる。花村優衣だ。花村は自己主張が強い上に見栄っ張りな性格で、クラスでは少し浮いた存在だった。もっとも顔は学年でも一・二を争う美人なので、押しの強い部分が引つ込めば男子からは人気が出ると思っている。

「校則では、校内での制服の着用が義務づけられていますけど、この暑さでしょう？ 授業中だけでも制服を脱いでも宜しくて？」

何を言っているんだという風にみんなの視線が花村に集中する。それを一身に浴びた花村は、いきなり制服のカッターシャツを脱ぎ始めた。俺はドギマギしてしまった。花村はシャツの下に何もつけていなかったのである。

花村は暑いからではなく、自分の裸を見せつけるためだけに脱いだのだ。注目などしたらそれこそ花村の思う壺だ。そう思っても花村から目が離せなかった。

花村は脱いだカッターシャツを畳んで机の端に置くと、授業の再開を促すように藪木を上目遣いに見た。藪木は何か言いたげにしていたが、結局お咎めなしで授業を再開した。男子連中は授業中、花村の方ばかり見ていた。

授業が終わると、花村は何事もなかったように制服を再度身に纏った。

昼休み、1―Aの教室では花村に関する話題で持ちきりだった。具体的には以下のような言葉が、主に男子たちの間で交わされた。「花村のヤツ、自信満々に脱いだ割に、すっげえ貧乳だったな」

震災日記

今日、美雪が住んでいる町で、とても大きな地震が起きました。

美雪は慌てて机の下に隠れました。タンスが大きく揺れて、棚からものが落ちました。部屋の電気が消えました。揺れは十秒以上続いたように思います。

揺れが収まったあと、お母さんが二階まで来て、ケガはないかと訊きました。美雪はどこもケガはしていないと答えました。下に降りてみると、戸棚から食器が落ち、床で粉々になっていました。外を見てみると、隣の田中さんの木造の家が崩れていました。お母さんは青い顔をしてラジオに聴き入っています。

しばらくしてお母さんが、津波が来るかもしれないから避難所に行こう、と言いました。美雪とお母さんは最低限の荷物を持って車に乗り込みました。高台にある公民館まで行くそうです。道はとても込んでいて、車が中々前に進みませんでした。

公民館の中は人でいっぱいでした。毛布が敷かれていて、その上に人が寒そうに座っています。みんな暗い顔をしていました。美雪とお母さんは空いている場所に座りました。

避難所でも時々大きな余震がありました。そのたびにみんなが悲鳴を上げました。お母さんは隣町のおばあちゃんの家に電話をかけましたが、全く繋がらなかったそうです。お腹が空いたと言ったらお母さんは困った顔をしました。夜になったら炊き出しがあるとお母さんは言いましたが、いつまで経ってもご飯は食べられませんでした。

夜中、トイレに行きたくなって目を覚ますと、近くで誰かのすすり泣く声が聞こえてきました。声の方を見てみると、泣いていたのはお母さんでした。美雪はトイレを我慢して、寝たふりをしました。夜が明けました。朝一番に給水車が来たのでお母さんが並びに行きました。水は貰えなかったそうです。昼過ぎから雪が降り始め

ました。美雪はとてもお腹が空いています。いつになったらお家に帰れるのでしょうか。

今日はホワイトデー

「ねえ、今日はなんの日分かる？」

恋人の加奈子が唐突に訊く。クイズの答えは、カレンダーを見るとすぐに分かった。

「バレンタインデー？」

「うん、正解」

いつもの加奈子なら、ここで後ろ手に隠し持っていたチョコを登場させるはずなのだけど、今年はそれが無い。怪訝な目で見てみると、加奈子は訳の分からない単語を口走った。

「今年は逆チョコが流行ってるらしいよ」

「逆チョコ？ なにそれ」

「普通とは逆で、バレンタインデーに男が女にチョコをあげて、ホワイトデーに女が男にお返しをするの。私たちもやってみない？」

妙な流行があるものかと思ったけれど、チョコを授受する順序が逆になるだけであるからして、受け入れても別段問題はなからう。

「分かった。今年はまず僕が加奈子にチョコを贈ればいいんだね」

「じゃあ明日までには用意すること。いい？ 安物だと承知しないからね」

加奈子を怒らせると怖いので、「分かったよ」と素直に答えて要請を許諾しておいた。

「ねえ、今日はなんの日分かる？」

加奈子が唐突に訊く。クイズの答えは、カレンダーを見るとすぐに分かった。

「ホワイトデー？」

「うん、正解。……で、お返しは？」

加奈子は掌を上に向けて右手を差し出す。僕は違和感を覚えた。

……なんだろう。なにかが間違っている気がする。

「なによ、まさかお返し用意してないの？」

「うん。……ごめん」

「じゃあ明日までには用意すること。いい？ 安物だと承知しないからね」

そもそも今年、加奈子からチョコを貰ったわけ？ そんな疑問が浮かんだけれど、加奈子を怒らせると怖いので、「分かったよ」と素直に答えて要請を許諾しておいた。

奇妙な現実

1

石原慎太郎の某著書を読了し、読後感に耽っていると不意に、自分の瞬きの回数が異様に多くなっているように思われ出した。そのことを意識すると、瞼が閉じられる頻度はさらに高くなったようだった。計測してみると、実に二秒に一回は瞬きをしている。平時における瞬きはこれほど頻繁でなかったように思われる。瞼を閉じることを極力我慢しようと試みても、どうしても二秒ほどで閉まってしまう。瞬きの回数が多くなるのは何かの病気の兆候と聞いたことがあったので、自分は気を悪くしたが、家の用事をしているうちにいつの間にかその症状は治まっていた。

2

中学生の時分、自転車を悠長に走らせて目的地に向かっていていると後ろから別の自転車にベルを鳴らされた。道を開けるという意味だと解釈して、歩道の左端によけると、また背後からベルの音が響く自分に何か用があるのかと思い、自転車を停めて振り向くと、赤い自転車に跨った禿頭の中年男性に怒鳴られた。ちんたら走っているのが邪魔だと言う。

迷惑行為を働いた自覚はなかったが、自分は男性に謝った。男性は自分を睨みながら去った。胸にはただ理不尽な思いが残った。

それ以来、自転車にはあまり乗っていない。

3

同性愛者に襲われたことがある。駅のホームでベンチに座って電車を待っていると、やけに馴れ馴れしく声をかけてきた若い男に、下着の中に手を滑り込まされて尾骨を触られたのである。股間などではなく尾骨という点に生々しいリアリティを感じ、自分はその男

をホモと断定したのだった。そういうわけで男性諸君、親しげに喋りかけてきながらパンツに手を入れてくる男がいたら、そいつは間違いなく同性愛者だから、即刻逃げるように。

白い贈り物

近所にとても可愛いらしい女の子が住んでいる。名前はハルカちゃんと言う。僕はロリコンではないが、最近ハルカちゃんのことを物凄く気になるのである。

ハルカちゃんは小学一年生だ。毎朝桜色のランドセルを背負ってお爺ちゃんと手を繋いで家の前の道を歩き、曲がり角でお別れして一人で学校に向かう。僕はロリコンではないが、日頃からハルカちゃんを観察しているので、その流れを把握しているのである。そんなお爺ちゃん思いの優しいハルカちゃんに、決してロリコンなどではない僕から、愛の一欠片をプレゼントしようと思う。

ある晴れた朝、僕は例の曲がり角でハルカちゃんを待ち伏せした。やがてハルカちゃんの家から二つの影が現れた。ハルカちゃんとお爺ちゃんだ。ハルカちゃんの笑顔は今日も眩しい。その輝かしい笑顔を見ながら、僕は露出させたペニスを激しくこく。全てはハルカちゃんにプレゼントを贈るためである。

二人が曲がり角まで来た。ハルカちゃんは手を振ってお爺ちゃんと別れる。お爺ちゃんはハルカちゃんに背を向けて去っていく。その後ろ姿が自宅へと消えたのを見届けて、下半身裸の僕はハルカちゃんの前に躍り出た。

「ハルカああああ！　好きだああああ！」

ハルカちゃんは吃驚している。本当は彼女の前に現れると同時にプレゼントを贈るつもりだったのだけど、発射準備が少々遅れた。

「こらあ！　何をやっとなるんじゃ！」

お爺ちゃんが怒鳴り声を上げながら走ってきた。声を発したのが不味かったらしく、醜行が露見してしまったようだ。しかし幸いにもハルカちゃんは逃げる素振りを見せない。プレゼントをするだけして、捕まる前に逃げよう。僕はペニスをこする手の動きを早めた。お爺ちゃんが僕の肩を掴んで自分の方に振り向かせたのと、僕が

射精に至ったのは同時だった。斯くして僕は、お爺ちゃんのシワだらけの顔面に盛大に白濁をぶちまけた。

老人と自殺志願者

曇天の広がる中秋の八つ時、高山老人は老眼鏡の奥の双眸を光らせながら、地元では自殺の名所として悪名高い岬周辺の岩場を散策していた。断崖から身を投げようと企む人物を見つけて声をかけ、七十余年の間に培われた語彙と機知を駆使してその者に自殺を思い止まらせることが、いわば高山老人の定年後の生業であった。

高山老人はやがて、ある切り岸の縁に一人の青年が立っているのを発見した。彼は直感的に青年がクロであると判断した。

青年に静かに歩み寄った高山老人は、その肩を叩いて、あんた自殺するつもりかね、と声をかけた。青年は初めこそ狼狽した様子だったが、すぐにその指摘を認めた。そして青年は、今日の夕食の献立が決まらなくて困っているんだ、と打ち明けた。

高山老人は笑って、じゃあ僕と一緒に夕飯を食べよう、と提案した。そして行きつけの定食屋に彼を連れて行った。最初は気が進まない風だった青年は、何度か高山老人に勧められて、漸く定食に箸をつけた。すると沈んでいた青年の顔に光が差した。そうして開き直ったように皿の上の料理を食べ始めた。

食後の青年の顔色は、声をかけた時と比較して見違えてよくなっていた。青年はどこか吹っ切れた様子で食事の礼を言った。高山老人は安心してきつた心持ちで、去っていく青年の後ろ姿を見送った。

翌朝、朝刊を読んでいた高山老人は、いつも見回りに行く岬で昨夜、一名の自殺者が出たことを知った。身元は不明だったが、記されていた外見的特徴から判断して、自殺したのはあの青年に相違なかった。青年が言った夕食とは、最後の晩餐のことを指していたのだと、高山老人はこの時初めて気がついた。

その日を境に、高山老人が行きつけの定食屋に足を運ぶことはなくなった。だが八つ時に岬を歩き回り、崖の縁に立つ人間に声をかける日課は続いているようである。

本当どうかしてたあの頃の自分

本当、あの頃の自分はどうかしてたと思う。

幼少時の自分は、猫は小鳥と友達になりたいのだと思い込んでいた。

幼稚園の頃、クロという安直な名前の黒猫を飼っていた。クロは庭木に雀などの鳥がとまっているのを見つけると、奇妙な唸り声を発してその鳥を威嚇するような構えを見せた。まだ幼かった自分は、どういふ弾みからか、クロはその鳥と友達になりたいからそんな風に鳴いているのだと解釈していた。

友達になりたいというメッセージを送っても無視され、近寄れば逃げるように飛び立っていかれる……。そんなクロのことが自分は不憫で仕方がなかった。けれども自分には両者を引き合わせる能力も知恵もなく、どうしてやることも出来なかった。

そんなある日、自分は庭の松の木の下で、一羽の雀が血まみれの姿で死んでいるのを発見した。当時の自分は、幼いながらも死というものの概念を理解していた。友達が死んでいる姿を見たら、クロはきつと悲しむ。そう思って自分は狼狽したが、当のクロは塀の上で平然と顔を洗っていた。よく見ると、その口許は赤く汚れている……。

自分は静かにクロに歩み寄ると、いきなり首を掴まえて地面に押しつけた。そして植木鉢で彼の頭を滅茶苦茶に殴打した。飼い主からの突然の非常な仕打ちに、クロは抵抗する間もなく死んでしまった。

自分は、大切だと思う相手には殺してしまうほど暴力的に接するのが本来あるべき友情の形なのだと思い込み、それを友達であるクロに対して実行したのだった。

やがて小学生になった自分は、仲良くなったある友達を、クロの時と同等の考えから、クロと同等の方法で殺めた。施設に送致され、

職員の指導を受けた自分は、その考えが誤りであると理解するに漸く至った。その御陰で、今は人並みの平凡な暮らしを送れている。本当、あの頃の自分はどうかしてたと思う。

蜂の話

ああ、この手ですか？ …… あはは。凄いでしょう？ こんなにも腫れちゃって。

いやね、昨日庭いじりをしていたら、不運なことに蜂に刺されちゃいましたね。

その蜂は、なんの種類の蜂だかは知りませんが、蜘蛛の巣に引つかかっていたんですよ。蜘蛛の巣に囚われて、喧しく羽音を立てているわけです。それもちゃんとした巣ではなく、宿主のいない半壊状態の蜘蛛の巣に。

普通なら、蜘蛛の巣にかかっている虫なんか放っておきますよ。でも、その巣に蜘蛛はいないわけでしょう。もしこのまま糸から逃られなければ、その蜂は他の動物に捕食される可能性のない状態で死んでしまうことになる。要するに、一つの命が全くの無駄となってしまうわけです。そう考えると、結果的にその蜂の死期を早めることになるとしても、やはり助けるべきなのではないでしょうか。羽音がいかにも哀れっぽく聞こえたからというのも多少はありますけど……。

ですから早速助けにかかりました。蜂も大分弱っていたようですから、あまり警戒もせずに、こう、丸めた掌ですくうようにして。

ですが、蜂はやはり蜂なんです。救い出した瞬間、右手に激痛が走りましてね。あつ、これはやられたと思いましたよ。痛みが走った箇所を見ると、見る見る赤く腫れ上がってきましたね。こうなったら蜂どころじゃありません。急いで病院に行って、然るべき処置を受けて今に至るというわけです、はい。

それだけだと、ドジな中年男の失敗談で終わるんですけど、ちょっとした後日談がありましたね。

その翌日、つまり今朝ですね。あの蜂はあのあとどうなったのかと思ひまして、例の蜘蛛の巣の付近を探してみると、すぐ下の地面

にその姿を見つけました。脚が一本欠けているという特徴が昨日助けた蜂と同じでしたから、それであの蜂だと分かったのですが、その蜂はすでに力尽きて蟻に食われてました。

昨夜の椿事

昨夜、野暮用があつて夜中の二時に外を歩いていたら、道端に白い大きな塊が落ちていたんです。足を止めてよく見ると、女性が一糸纏わぬ姿で蹲っているのだと分かりました。

夜道に人が座り込んでいただけでも気になるのに、その上、裸で女性となれば気掛かりどころではありません。どうかされましたかと声をかけると、その女性の顔がいきなり、首から上だけが回転するようにしてこちらに向きました。私は思わず悲鳴を洩らしました。その女性の顔面は、痣やら涙やら鼻血やらで、それはもう酷い有り様だったのです。

女性は私の姿を認めると、醜い表情をさらに歪め、奇声を発しながら私へと迫ってきました。瞬間的に身の危険を感じて、私は一目散にその場から逃げだしました。すると女性は走って私を追いかけってきました。振り切ろうと私は走る速度を上げます。しかし女性も死に物狂いで追いつてきます。

交差点に差しかった時、目の前の信号は赤でしたが、私は横断歩道を駆け抜けました。渡りきったところで振り返ると、女性が髪を振り乱しながら横断歩道を今まさに渡ろうとしているところでした。しかし彼女が白線を一步踏んだ瞬間、真横から猛スピードで走ってきた大型トラックが彼女を撥ね飛ばしたのでした。女性は即死でした。

警察の方の話によれば、女性からは、事故の数十分前に複数の男に強姦された形跡が認められたそうです。これを聞いて、彼女が私に執着した理由は概ね理解できました。

そこで疑問に思うのですが、この場合、彼女の死の原因は一体誰にあるのでしょうか？

煎じ詰めれば彼女を犯した男達が悪いに決まっていますが、事故の直接の原因ではありません。撥ねたトラックの運転手も、青信号

を走っていたのですから罪はないでしょう。信号を無視し事故を誘発した私に非があるようにも思えますが、彼女が信号を守っていればそもそも事故は防げたわけです……。

嘔吐

憧れの先輩とデートをしていたら、いきなり先輩が嘔吐した。昼下がりの日曜日の、人で賑わう駅前大通りでの出来事だった。

吐瀉物の前にうずくまった先輩は、今にも再発射しそうな気配を色濃く醸している。人混みの只中に一人座り込む女を怪訝に思った通行人が先輩を覗き見ては、吐瀉物を認めて顔をしかめ、嫌悪と嘲りの混じったような表情を向けながら彼女から離れていく。

先輩の隣で立ち尽くす俺は途方に暮れていた。先輩を介抱すべきなのか、それともまず吐瀉物を片付けるべきなのか、それが分からなかったのだ。事故のようなものとはいえ、目の前で吐かれたことで、先輩に対する好感度は大幅に下がっていた。いつそ吐瀉物ごと先輩を放置して一人で家に帰ろうかとも思う。

不意に視界の端に、先輩に向かってケータイを構えている男の姿が映った。……シャッター音が鳴った。先輩のことを写真に撮ったらしい。周りをよく見ると、男他にも、先輩にケータイを向けている通行人が複数いた。

先輩はただ体調が悪くて嘔吐しただけなのに、好きで吐いたわけではないのに、これではまるで晒し者じゃないか。こんな仕打ち、いくらなんでも酷すぎる――。

そう思うと、俺の体は自然に動いていた。

「写メールやめてくださあい！」

先輩を守るように立ち上がり、無礼を働く連中に大声で呼びかけたのである。

「彼女はただ、気分がすぐれなくて吐いてしまっただけなんです！ 見せ物じゃありません！ 見るのはやめてくださあい！ 写メールやめてくださあい！」

それがあの時の俺に出来た最善の行動だった。今でもそう思っている。

でも先輩は、その件が蒸し返されるたびに、柳眉をひそめてこう言うのだった。

「周りの人間の心ない振る舞いにも勿論腹が立ったけど、私はなにより、あなたの無神経な言動に傷ついたわ」

性器について

ショッピングセンターで妻に言いつけられた物品を一通り買い終えた私は、ベンチに腰を下ろして一休みしていた。すると背中合わせに設置されていたベンチから、女子高生と思しき若い二つの声がこんな会話を交わしているのが耳に入ってきた。

「ペニスって、人体から取り外して持ち運び出来たら便利じゃない？ 性的な意味で」

「なにその発想。超斬新なんだけど。でもそれだとバイブとかと変わらなくない？」

「いや、生のペニスだからさ、バイブとかと違って、外的な刺激の有無で萎えたり漲ったりするの。臨場感があってよくない？」

「なにそれ。便利なんだか不便なんだか分からないんだけど」

いかにも今時の若者らしい、物質的な物の考え方だと思った。仮に男性器が取り外し可能になれば、確かに便利は便利に違いない。

しかしその発想には、人間として最も大切な、失ってはならないものが失われている。

「私はそのアイデアには賛同できないな」

振り返って私は言った。二人は驚いている。

「性をそういう風に物質的に捉えるのはいかなものかな。生身の人間同士が面と向かってするからこそそのセックスだろう。その前提をなくしてしまうのはどうかと私は思うよ」

二人は顔を見合わせ、うち一人が言った。

「じゃあおじさん、逆に女の人のおそこが取り外せると考えてみてよ。出張先でも奥さんとエッチできるんだよ。超便利でしょ？」

確かにそうだと思うってしまった。具体例を出された分、すんなりと腑に落ちたのだろう。反論できずに黙ってしまう。

二人はまた議論を再開した。性器を取り外した後の排尿はどうなるのか、ということについて意見を交わしているらしい。

私は彼女たちの論議の邪魔をせぬよう静かに腰を上げた。そして『銀だこ』で八個入りのたこ焼きを購入し、妻の待つ我が家へと急いだ。

ラーメン店での一コマ

近所に「無法松」という名前の拉麺店がオープンしたので、食べに行ってみた。

カウンター席に座り、メニュー表を開く。どうやら「無法松拉麺」というのがこの店の看板メニューのようだ。コシの強い細麺とピリ辛のスープがウリらしい。普通の拉麺や、餃子や炒飯といった定番メニューは勿論、「超無法松拉麺」なんていうのもあった。

とりあえず「無法松拉麺」を試しに食べてみよう。そう思って店員を呼び止めたところで、素朴な疑問が胸中に芽生えた。それは「無法松拉麺」と「超無法松拉麺」の違いは一体なんなのか、ということだった。というのも、メニュー表の写真を見る限り、両商品に映像的な差違はどこにも認められないのだ。

「超無法松拉麺」の方の値段が高いのので、「無法松拉麺」の量が多いバージョンがそれなのかと最初は考えた。しかしメニュー表の端を見ると、百円追加で大盛りもご注文いただけます、などと書いてある。そういうことであれば、量が多いだけの同じメニューを名前だけ変えてメニュー表に記している可能性はないように思える。

事のついでと思って、素直に店員に訊いてみた。「超無法松拉麺」と「無法松拉麺」はどこがどう違うんですか、と。

すると店員は視線を泳がせた。それが自分の方に定まったかと思うと、ちよつと訊いてみますと言って店の奥に引っ込んでしまった。僕は困惑した。よもや従業員が、己が働く店の商品の違いを知らないとは思わなかったからだ。些細な疑問を訊いてみただけなのに、店側に多大な迷惑をかけたかのような錯覚がした。拍子抜けがした気分でもあった。

戻ってきた店員は、「超無法松拉麺」は「無法松拉麺」よりスープがさらに辛いそうです、という酷く肩透かしな解答を口にした。ご注文の方は、と店員が訊く。だから僕は、その解答を踏まえて、

こつ答えた。

「普通の拉麺と、それと餃子をください」

ある被害

今朝、クラスメイトの畑山さんと廊下ですれ違った際に、彼女と視線が交差した。その瞬間、彼女はレイプされたのだという想念が僕の胸中に忽然と生まれた。

その時の畑山さんは、違うクラスの女友達と立ち話をしていただけて、自分が強姦の被害に遭ったことを匂わせる言動を行っていたわけではない。それなのに、なぜ唐突にそのような観念を抱いたのか。その理屈は分からなかったが、とにかく畑山さんがレイプされたという考えが胸に強く迫ったこと、それは歴とした事実だ。

だから僕は、学校にいる間、畑山さんの一挙手一投足に注意を凝らしていた。畑山さんが本当に強姦されたのであれば、いつもと同じ調子で学校生活を過ごすことなど到底できないはず。普段の畑山さんには見られない素振りを今日の畑山さんは見せていないか、それを確かめようと考えたのである。

放課後まで観察を続けたが、畑山さんに特に不審な点は見られなかった。女友達数人と机を囲んでお喋りする休み時間の姿はいつも通りだったし、国語の時間に先生にあてられて教科書の一文を朗読する時の声も普段のようにハキハキしていた。給食のパンを食べきらずに半分残してしまうことや、サボる他の生徒を尻目に真面目に掃除に取り組む姿だって昨日までの畑山さんとなんら変わらない。

でも、畑山さんは、昨日、お母さんから貰った手作りの小物入れをなくしてしまったと言っていた。学校から帰宅して鞆を見てみると、ファスナーを閉め忘れていたことに気がついて、鞆の中身を確認してみると、中に入れていたはずの小物入れがなくなっていたらしい。だから下校の途中でどこかに落としたのかもしれないのだそう。

探してみることは探してみるけれど、前のように綺麗な状態で戻ってくることはないだろう。そう話す畑山さんの横顔は酷く悲しげ

で、なおかつ暗示的だった。

サツキツツジの季節に

先日、ドライブ中に凄い光景を目撃した。

赤信号で車を止め、ふと窓外を覗くと、中央分離帯に植わったサツキツツジの陰で、女子高生が、なんと脱糞をしていたのである。

「――何してるの？ そんなところで」

声をかけると、女子高生は顔を上げてこちらを見たが、すぐに視線を切った。排便を続行するつもりらしい。周囲の雑音の間を縫って、大便が絞り出される生々しい音がいやに明瞭に聞こえてくる。

「どうしたの？ お腹痛いの？」

大声で呼びかけたが、女子高生はもうこちらを見ようとすらしない。排気ガスの臭いに混じって漂ってくる大便の悪臭が鼻につく。

「人が心配しているのにその態度はなんだ！ 何をやっているのかと訊いているんだ！」

怒鳴り声を上げた途端、女子高生は瞳から涙を落とし始めた。突然のことに面食らった。泣いている姿を見ると、彼女のことを急に可哀相に思えてくるから不思議だ。私は声音を優しくして彼女に囁きかけた。

「何があつたのかは知らないけど、とにかくそこでの排泄行為は迷惑だよ。一旦そこから出てきなさい。迷惑だから……ね？」

「お前の方が迷惑だ、馬鹿野郎！」

出し抜けに後方から怒鳴られた。同時にクラクションも鳴らされた。罵声を浴びせたのは後続車両の運転手だった。我に返ってフロントガラスに向き直ると、目の信号は青に変わっている。

私は慌てて車を発進させた。女子高生の姿は瞬く間に窓外の彼方へと消え去った。

彼女は結局、どのような理由があつてあの場所で脱糞をしていたのだろう。何度も考えてみたけれど、納得のいく答えは未だに見つ

けられていない。あるいは彼女はサツキツツジの精霊だったのかも
しれないとも思ったけれど、仮にそうだったとしても、脱糞をして
いた必然性がないことには変わらないし……。

塩気

小さいころから男の子になりたくて仕方なかった。だって男の子は女の子と違って、人前で公然と鼻をほじっても、面と向かって咎められることはないんですもの。

小さいころから鼻をほじるのが好きだった。その習慣は二十歳になっても色褪せることなく続いている。鼻から吃驚するほど大きな鼻糞をサルベージした時のあの喜び、鼻孔の風通しがよくなった時のあの爽快感、食べてみて初めて分かるあの美味しさ――。これらは何物にも代え難い。みんなはこんな気持ちいいことをなんでやらないのかと思う。

私は今までこの快感を一人で貪るばかりだった。しかし大人となった今では、この喜びを多くの人々に布教する義務感を自覚している。素晴らしい物事を世間に広めようと思うのは、考えてみれば当然のことだろう。

大きな夢は、身近な一歩から。

「はい、ユウくん。わたしが丹精込めて作ったおにぎりよ。ちゃんと召し上げれ」

ピクニクに来たわたしは、恋人のユウくんにおにぎりを勧めた。ユウくんはそれを手掴みし、大きな口で一口食べる。

「……うん、塩気が効いてて美味しい！」

「よかった、特製の具材を入れておいて」

「特製の具材って、この所々に入ってる、干し葡萄みたいなやつのこと？」

「そう。見た目はちょっと悪いけど、とっても美味しいでしょ？」

「うん。……しかし美味しいなあ」

ユウくんは夢中でおにぎりを頬張っている。その光景に思わず口許がにやける。

布教する立場に立ってみると、やっぱり女でよかったと思う。だ

つて女は毎日三回台所に立つのが仕事の生き物。食事に毒を入れるのも薬を入れるのも自由な身分なんだから。

「これはみんなに布教したくなる味だね。もしよければ僕の友達にも作ってくれない？」

作戦成功！ 全人類が鼻糞の素晴らしさを理解する日も、そう遠くはないみたいね。

白日夢

同棲してた彼氏とケンカして別れた。それで今、雨の中、傘もささずに立ち尽くしてる。

女の子が雨に打たれているんだから、誰かが声をかけてくるだろう。そう思って立っているのと、妻夫木聡似の男が声をかけてきた。

「こんな所で立っていたら風邪を引きますよ。僕のやってる焼き肉屋で雨宿りしていきませんか。是非ご馳走になつていってください」行くアテもないし、丁度お腹も空いていたところだったので、妻夫木くんについて行くことにした。それで今、開店前の焼肉屋の店内で、椅子に座って料理が来るのを待つてる。

注文した肩ロース肉がテーブルにきた。早速焼いて食べた。すると急に眠たくなった。

気がつくと、あたしは全裸になつて大きな俎の上に仰向けに寝ていた。厨房の中のようなうだ。傍らでは妻夫木くんが肉切り包丁を握っている。

妻夫木くんが包丁を振るつた。あたしの肩の辺りの肉が骨から綺麗に削ぎ落とされた。彼はその肉片を丁寧洗って血抜きをすると、さらに一口サイズにカットした。その途端、全身がいく等分かに切断されたような痛みが走った。切られた拍子に、あたしの意識はどうやら肩ロース肉に移ってしまったらしい。

そうしているうちに店が開いた。あたしは皿の上に載せられて賑わう店内を見ていた。すると見覚えのある顔の男が入店してきた。ケンカ別れたあたしの元カレだった。

元カレは席に着くや否や、肩ロース肉を注文した。オーダーを受けて妻夫木くんが、あたしが載った皿を元カレの席まで持つて行く。元カレがあたしを箸で掴み、火にかけられた網の上に置いた。あたしにはすぐに火が通った。元カレが焼けたあたしを再び箸でつまみ、タレにつけて、それから口へと運んだ。

このあと、きつとあたしは粉々に噛み砕かれて、食道、胃、小腸、大腸と駆け抜けて、汚らしい排泄物となって元カレに永遠の別れを告げるのだろう。

こんな御時世

黄昏時に近所の公園内を散歩していますと、砂場で遊んでいる年端のいかない女の子を見かけました。小さなバケツに汲んだ水で砂を濡らし、それを手でこねて団子状にしたものをいくつも作っています。

砂場から少し離れたベンチでは、若い女性が携帯電話を熱心に操作しています。顔立ちの相似性から判断して、彼女が女の子の母親なのでしょう。迷子でないなら問題はないと思いますが、女の子は泥団子作りに夢中で、ワンピースの裾に砂が付着していることに気がついていません。お節介だとは思いましたが、一声かけることにしました。

「お嬢ちゃん。気をつけて遊ばないと、スカートが汚れていますよ」
その途端、ベンチの女性が猛然とこちらに走り寄ってきたかと思うと、女の子を守るように私の前に立ち塞がりました。私は目を白黒とさせました。女の子も驚いている様子です。女性は鬼のような形相で私を睨みつけると、捲し立てるようにこう言いました。

「ちよつとあなた、あたしの大事な一人娘に何するつもり？ もしかしなくても、あなた、ロリコンでしょ。人目を盗んでこの子を連れ去ろうとしたたんでしょ。それでどこか人気のない場所に連れ込んで、性的なイタズラをするつもりだったんでしょ。……ほおら、何も言えない。凶星ね、凶星。——この変態！ 異常性欲者！ 社会のゴミ！ ……翠ちゃん、大丈夫？ このロリコン薄らハゲキモヒゲ中年になにかされなかった？ ママが来たからもう大丈夫だからね。さつ、もうお家に帰りましょうね。犯罪者と同じ空気吸ってたら変な病気になっちゃいますからねえー」

母親は娘の泥だらけの手を強引に引っ張り、足早に公園から去っていききました。

啞然と親子の後ろ姿を見送る私の胸には、母親に対する怒りの念

は微塵も生まれませんでした。浮かんでくるのは、翠と呼ばれた幼
い少女の行く末を案ずる気持ちばかりでした。

密室の悪夢

京都市の快速電車が姫路駅を経て間もなく、吊革に掴まっていたエリは、臀部に硬い手の感触を覚えた。背筋に寒気が走った。痴漢だ、と思った。車内は満員だった。

手は下着越しに尻の膨らみを揉みほぐすような動きを見せた。嫌悪感を覚えたエリは、空いている手を後ろに回し、まとわりつく痴漢の手を払おうと試みた。しかし敵は怯む様子なく尻を撫で続け、行為を決して止めようとはしない。

不快な感情は純然たる恐怖に変貌しつつあった。エリは痴漢に遭ったことは何回かあったが、太股や尻を軽く触られる程度のもので、今日のように図々しい痴漢は初めてだった。

恥辱に甘んじることは耐え難かった。しかし声を上げて助けを求めることは躊躇われた。衆人環視の中で被害を自己申告する行為が、エリには気恥ずかしく感じられたのである。

電車が加古川駅に停車した。エリは降車客の流れに混じって車内を移動し、出入り口付近に立つ位置を変えた。これで痴漢から逃れられるはず――。エリは安堵の溜息をついた。

だが電車が走り出してすぐ、エリの臀部に何かが触れた。硬い感触だった。それは紛れもなく、先刻の不屈き者の手だった。

エリは男の執念深さに慄然すると同時に、男の蛮行を止めさせる必要性を強く感じた。エリが降りる駅は終点の京都駅である。そこに着くまでの間この恥辱に耐え続けるくらいならば、その場限りの気恥ずかしさを我慢して声を上げるべきだと彼女は判断したのだ。

意を決したエリは、己の臀部を触っていた手を掴むと、それを高らかに掲げて、この人痴漢です、と叫んだ。

次の瞬間、車内の乗客が一斉にエリに視線を注いだ。一拍の間のあと、エリは恐怖に足を竦ませることになる。なにせ車内にいる乗客の全てが男性であり、その彼らが一様に、悪足掻きする獲物を冷

ややかに諭すような色を双眸に宿してエリを見つめていたのだから。

狡さ

質朴な少年の義行は、狡猾でワガママな少女の愛莉に恋心を抱いていた。愛莉はその感情を利用して、己が所望するものを義行に貢がせるような真似をした。純粋な義行は、自分が都合よく利用されていることも知らずに、愛莉の要望に従順に応えていた。

ある日、愛莉は唐突に、トラ猫が飼いたい、と言い出した。愛莉曰く、家族の了承は既に得ているため飼うこと自体に支障はないが、気に入った猫が見つからないのだと言う。ペットショップで買うのは高いから、捨て猫を拾ってくるのが好都合なのだそうだ。

この遠回しの要求を、義行は勿論とばかりに請け合った。全ては愛する人のためにといい心意気だった。

数日後、義行は公園の片隅に置かれたダンボール箱に、数匹の仔猫が捨てられているのを発見した。その中には愛らしいオスのトラ猫もいた。彼はその仔猫たちを拾い、それぞれ里親を見つけた上で、一匹だけ手許に残しておいたトラ猫を愛莉へプレゼントした。

まさに自分が欲していた柄の仔猫を前にして、愛莉は大変な喜びようを見せた。それを見て義行は満足げに微笑んだ。愛莉が喜んでくれればそれでいいという思いだった。

トラ猫を胸に抱いたまま、愛莉は唐突に真剣な顔になった。そして、トラ猫をプレゼントしてくれた礼に義行と付き合ってもいい、と発言した。義行の頬は一瞬にして紅葉の葉のように色づいた。突然のことに戸惑いはしたが、愛莉のことを心から愛している義行にその要請を拒む理由などどこにもない。すぐに謹んで受け入れる意思を彼女に示した。

愛莉はどこまでも狡い女だった。なにせ彼女は、自分に対する義行の気持ちをきちんと把握し、彼ならば断らないに違いないと確信した上で、その要求を口にしたのだから。

その狡さを今は肯定するかのように、柄にもなく紅色に染まった

愛莉の頬を、二人の恋のキューピッドが優しく舐めた。

七色

郊外にある大きくて素敵なテーマパーク『ファンシーランド』では、ゴールデンウィーク期間限定で、大がかりで素敵なイベントが催されていました。それは、園内に散らばった七人の従業員を見つけ出して、彼らから風船を一色ずつ受け取り、七色全て集めて入場ゲート前の係員に見せると豪華景品が貰える、というものでした。しかし景品を獲得するのは一筋縄ではいきません。従業員がカラフルな風船を手にくれていければそれが目印になって分かり易いのですが、彼らは風船を膨らませない状態で持っているのです。従ってイベントの参加者は、園内に無数にいる制服姿の従業員の中から、風船を持つている者をまず探し当てなければなりませんでしたが、しかもその従業員は一箇所に留まらず、絶えず広大な園内を歩き回るので、発見するのはなお大変です。

七歳児の優花ちゃんは、イベントに参加してすぐに、その難しさを悟りました。ですから、直ちに風船を探すことを断念しました。貰える可能性の低いもののために時間を費やすくらいなら、その分アトラクションで遊んだ方が有意義だと考えたのです。

でも、豪華景品は、やっぱり欲しい。

そこで優花ちゃんは、売店に行き、真っ黒な風船を購入しました。そしてそれをお父さんに膨らませてもらった上で、入場ゲートの前の係員に差し出しました。まるで七色の風船を全て集めて持ってきたと言わんばかりに。

「それは売店で売っている風船だね。七色の風船じゃないと景品はあげられないよ」

係員のお兄さんは当然そう言います。しかし優花ちゃんは頭を振り、こう主張しました。

「風船ならちゃんと七つ集めたよ。七つ揃った風船のことを、優花ね、とても綺麗だと思ったの。それで、それが一つに合わさったら

もっと綺麗になると思って、合体させたの。そうしたらね、予想と違って綺麗にはならず、こんな風に真っ黒になっちゃったの」

セツナシユギ

みなさんどうも初めまして。あたしの名前は長谷川七瀬。今ときめく女子高生。ラップに関しちや食欲旺盛。地平の果てまで轟かす美声。マイク一本で成し遂げる救世^{くせ}。それを今からお聴かせするので。耳の穴かっぱじって聴け。

あたし平成生まれの現代っ子。刹那に身を委ねることがきつと。世間受けするような純愛なんかよりも。素晴らしいことだと思ってる人よ？

だって生まれて死ぬまであつと言う間。人間、いつかは死ぬんだから。今したいことを今、した方が。幸せであるに決まっているわ。新学期、クラスに馴染めないな。そんな時は、カッターあつたかな。手首を切ったら、悲劇のお姫様。「そのケガどうしたの？」って、みんな。心配してくれたよ、嬉しいな。

ネットサーフィンしてたらヒット。なんかちょっとやばそうなサイト。気紛れでアクセスしてみたら、どうも。楽して稼げるらしいバイト。闇サイト？ よく分かんないけど。待ち合わせ場所に行ってみたら、なんと。ショートカットでラブホのベッド……。

これで五万とは、安い商売。いやらしいことされたけど、結果才一ライ。元はとれたから、問題なし。含み笑いが止まんない。

思い出される、幼きあの日。自分からやった、お手伝い。寒い日、かじかむ手、お皿洗い。暑い日、吹き出る汗、草むしり。お母さん、くれた百円玉、バカみたい。あたしが身を売って得た稼ぎ。それに比べりやはした銭。

徐々に増えていく、預金残高。貯まったお金で、なに買おうかな。膨らむ想像、楽しいな。人生、今が絶頂だわ。

あはは、あたしって、お金持ち。その顔、もしかして、羨ましい？ なら、あなたもやればいい。それだけの話じゃない？

長谷川七瀬の独り舞台。名残惜しいけど、これでおしまい。そう

いっわけで、みんなバイバイ

汀にて

浅瀬に両足を浸けた若い男が、砂浜の方に体を向けて、中腰の姿勢でしきりに手招きをしている。年齢は二十代半ばほどだろうか。下は膝までの長さのパンツに、上はＴシャツという服装の、精悍な顔つきをした男である。

その男に呼ばれているのは、波打ち際に立つ年端も行かない少女だ。桃色の水着を身につけた彼女は、どうやら男のもとに向かうとしているらしかった。二人は親子らしい。

しかしその小さな体は、決して海水の中へ進もうとはしなかった。小波が打ち寄せでもすると、娘は慌てて後退ってそれから逃れてしまふ。その際の様子と表情から、彼女が酷く水を怖がっていることが見て取れた。

父親は盛んに娘の名前を呼んで、一刻も早く自分のもとに来るよう要求する。しかし娘はどうしても海に入ることが出来ない。水面の上に足を踏み出すような仕草は見せるのだが、それを浸けるまでには至らない。

すると今度は逆に、娘が涙声で父親を呼び始めた。しかし父親はその場から動こうとはしない。ただ娘の名を口にして催促するばかりである。娘はとうとう泣き出してしまった。

父親は温かみのある苦笑をこぼした。そして娘に向かってゆっくりと足を進め出した。父親の両足が汀に限りなく近づいたその時、打ち寄せていた波が大きく引いて、彼の周囲から海水が綺麗に消え去った。

もう怖れるべきものは何もない。娘が一目散に駆け出した。あつと言う間に距離をないものにして、父親の脚に抱きついた。父親は笑顔で娘の体を易々と抱き上げた。そして涙に濡れた頬に柔らかく唇をつけた。はにかむような微笑を浮かべる父親の顔の横で、娘も頬を仄かに赤く染めて笑っている。

そんな微笑ましい光景を、散歩の際に立ち寄った海岸で私は見た。
日差しを受けた水面が輝きを放つ様子の美しい、初秋の午後のこと
だった。

庭前の殺人

昼下がりのうたた寝から目を覚まし、リビングのカーテンを開けて窓外に目をやると、六つになる息子の健太が一人で庭先に立っていた。休日のことだ。両手を水平に広げて、両足を揃えて背筋を真っ直ぐに伸ばして立ち、異様に真剣な眼差しで前方を凝視している。健太の右足が動いた。慎重に前方に踏み出されたそれは、踵を左足の爪先に触れさせる形で大地を踏み締めた。両足が縦に揃えられた恰好である。すると間もなく、今度は左足が動いた。左足は先程と鏡写しの軌道で移動し、右足の目の前の地面に下ろされる……。

両手を広げ、一直線上を辿るように極めて慎重に両足を交互に繰り出す様は、まるで峡谷に架された一本のロープの上を歩いているかのようなだった。しかし実際に健太が歩いているのは、庭先の乾いた土の上である。見ていてこれほど手に汗を握らない綱渡りというのも珍しいのではあるまいか。

その有り様があまりにも真剣なものだから、私は彼をからかってやりたいような心境になった。

音を立てぬようガラス戸を開け、ウッドデッキに降りる。健太は架空の直線の上を用心深く進む作業を一途に続けている。サンダルを履き、庭の土の上を忍び足で健太に近づく。彼は依然として私の接近に気づく様子がない。

とうとう彼の背後まで来た。

彼が踏み出した右足が、左足の前に静かに下ろされたその瞬間を狙って、私は彼の背中を軽く押した。ほんの軽い衝撃だったのだが、不意をつかれた恰好の健太はバランスを崩し、前のめりに地面に倒れてしまった。

健太は座り込んだまま、顔をこちらに振り向けた。私は発しかけていた言葉を思わず呑み込んでいた。彼が向けたその瞳の中に、あたかも横死した死者が死後の世界から己を殺した相手を凝視してい

るかのような、底知れぬ怨嗟の念が滾っていたものだから。

雨宿り

あの日は確か、夕方から雨が降る予報になっていたと記憶している。

けれども朝の空には清爽とした青が広がっていた。だから私は、あろうことが、傘を持たずに小学校に登校したのだった。

天気予報の通り、午後になると雨粒が落ち始めた。雨は下校時間になっても降り止まず、私は昇降口で足止めを食う羽目になった。待てども雨脚は激しくなるばかりである。せつかな私はすぐに雨宿りを断念し、覚悟を決めて雨の中へ飛び出していった。

私は雨に打たれながら通学路を走った。しかし道程の中程まで進んだところで、運悪く赤信号に引っかかってしまった。走っていればそうでもないが、立ち止まると容赦なく降り注ぐ雨が煩わしくて仕方ない。そこで私は、近くの民家の屋根を借りることにした。無論、信号が青になればすぐに立ち去る腹積もりで。

屋根の下に入っすぐ、背後の扉が開いた。そこは玄関口だった。現れたのは、桜色の衣服を着た、幼心にも美しい妙齡の女性だった。女性はずぶ濡れになった私を見るや、雨が止むまで家に上がっていきなさいと言った。そう告げられた途端、私はなぜか、自分はここに居てはいけない人間なのだ、という思いに支配された。この場所です雨宿りしたのは大きな間違いだったとさえ思った。

折良く交差点の信号が青になった。私は逃げるようにその場から走り去った。呼び止める女性の声を雨音の合間に聞きながら……。女性が貸してくれたタオルで体を拭き、雨が小降りになったら礼を言い残して去る――。

あの時、仮に反対の選択をしたところで、小学二年生の私を待ち受けていたのは、ただそれだけの未来だったに違いない。

しかし今になって、私はこう強く思うのだ。

もしあの時の自分に、あの見目麗しい女性の好意に甘える勇気が

あつたならば、自分は今頃、今よりも少しばかり華やかな人生を送っていたのではないか、などと。

特別なたこ焼き

「お嬢ちゃん、あなた、去年もウチにたこ焼きを買いに来てくれた人でしょ」

夏祭り。梓がたこ焼きを買いおうと屋台の前に立つと、彼女の顔を見た店主がそう言った。店主は左目に眼帯をかけた中年の男である。梓が去年の夏祭りでもたこ焼きを購入したのは確かだ。しかし梓はその中年男性の顔に見覚えがなかった。眼帯をかけているという特徴的な外見の人物の顔を、たった一年で忘れてしまっているのもおかしい気がして、梓は内心首を傾げた。

「実は、売っているのとは違う特製のたこ焼きが一つあるから、それを是非ともお嬢ちゃんに食べてほしいんだ。勿論お代はいらないよ。ウチを鼻屑にしてくれたお礼だからね」

店主はそう説明して、たこ焼きが一つだけのったパックを梓に差し出した。特製とのことだが、見た目は普通のたこ焼きと変わらないようである。

去年も買いに来た云々は方便で、体のいい新商品のモニター役を着せられただけという気もした。しかしタダで食べられるたこ焼きを拒む理由はないと判断して、梓は愛想笑い浮かべながらパックを受け取った。

爪楊枝に刺し、一口かじる。しかし生地の中に入っているものを噛み切れず、歯がそのものの表面を滑るように動いた。歯に伝わったその触感、タコの切り身とは異なるようだった。梓は反射的にたこ焼きを口から離し、かじったことで開いた穴の中を覗き込んだ。たこ焼きの生地の中に詰め込まれていた一個の眼球が、虚ろに梓を見返した。

梓は絹を裂くような悲鳴を上げてたこ焼きを投げ捨てて、一目散にその場から逃げ去った。店主は隻眼を細く歪めて笑いながら屋台から出て、地面に転がるこの世で一個限りの特別なたこ焼きを指先

でつまみ上げる。

「呆気ないねえ、一年越しの恋も」

それを無造作にゴミ箱に投げ捨てて、何事もなかったかのように業務に戻る。

女体

天谷稔は美術教師の名塚咲に恋心を抱いていた。名塚が顧問を務める美術部に絵心のない彼が入部したのは、偏に彼女の姿を一分一秒でも長く見ていたいという下心からだった。

しかし他の部員は彼とは異なり、純粹に美術を愛好することを主の目的とした生徒ばかりだった。自分以外の部員が女子ばかりという事情もあり、居辛くなつた稔は、五月の連休明けには幽霊部員と化していた。熱心な名塚は部活に復帰するよう頻りに稔に呼びかけたが、彼は決して部活に参加しようとはしなかった。

七月のある日、近々部でヌードデッサンの場を設け、そのモデルを名塚が務めるという話をクラスメイトの美術部員がしているのを、稔は耳にした。稔は自分もそれに参加し、名塚の裸を見たいと考えた。幽霊部員である自分がその目的のためだけに部活動に復帰することに引け目を感じなくもなかったが、彼からすれば恥も外聞もないという思いだった。

稔は名塚に部に復帰する意向を伝えた。その瞬間、名塚が困惑の色を一瞬見せたことを、彼は見逃さなかった。名塚は唯一の男子部員である自分が参加しないことを前提に裸を晒すと決めたために、自分が参加するのは不都合だと思っているのだ、と彼は考えた。

名塚は表面上では稔の復帰を歓迎した。だが稔には、名塚は顧問という立場上私的な感情を抑圧しているだけで、本心では自分を疎ましく感じているとしか思えなかった。

夏休み初日の美術部の部室で、名塚は己の裸体を披露した。筆を手にな塚を包囲する生徒の中には稔の姿もあった。意中の異性の裸を見た稔の第一印象は、極めて冷ややかなものだった。思春期の旺盛な肉欲を満たすには、名塚の裸はいかんせん迫力を欠いていたのだ。黙々と筆を動かし続ける部室の空気に耐えきれなくなり、稔は筆を抛って途中退席した。

翌日、退部届を提出した稔を、名塚が留意することはなかった。

世紀末の救世主

時は20XX年の日本。多大なる利権を獲得し、あらゆる面で優遇されるようになった障害者は、健常者をあたかも奴隷のように扱っていた。これはそんな悲惨な時代に起こった、ある救いようのないお話――。

「障害者様のお通りだ！ 頭が高いぞ、健常者ども！」

午後の穏やかな雰囲気にも包まれたカフェテラスに、突如アロハシヤツ姿の男が闖入した。その胸元には、精神障害者であることを証明する銀色のカードがピンでとめられている。

男はある美しい少女が座るテーブル席の前で足を止めた。そしていきなり、彼女が食べていたチョコレートケーキを驚掴みし、己の口の中に放り込んだ。少女は声をこぼし、驚きと怒りを含んだ瞳で男の顔を見返した。

その視線に気づいた男の表情が険しくなった。少女は我に返り、慌てて顔を逸らす。しかし男の双眸は少女から外れない。

「貴様、健常者の分際で障害者を差別したな。生意気な健常者には、こうだ！」

男は力任せに少女の衣服を引き裂き始めた。少女は身をよじらせ、悲痛に助けを求める。しかし周りの客は一樣にバツが悪そうに俯くばかりで、誰も少女を助けようとはしない。

男は下半身裸になり、陰茎を少女の口へ含ませようとした。次の瞬間、隣席に座っていた青年が椅子を蹴って立ち上がったかと思うと、男の横面を殴りつけていた。間拔けな声を発して男が床に叩きつけられる。青年は懷からナイフを取り出すと、男の首筋を一閃した。切創から噴水のように鮮血が迸る。男は電撃を加えられたかのように体を痙攣させたのち、凍りついたかのように動かなくなった。「あなた、なんてことをしたの！ 障害者を殺したのよ？ きつと

死刑になるわ！」

少女の非難の言葉に、青年は悠然と微笑んだ。そして懷から銀色のカードを取り出し、自慢気に彼女に示してみせた。

凄い効き目の惚れ薬

親友で自称発明家の徳田が、新しい発明品が完成したから、それのモニターになってほしいとの旨のメールを寄越してきた。

待ち合わせ場所の喫茶店に行くと、徳田は懷から香水の小瓶のようなものを取り出した。中には毒々しい紫色の液体が入っている。

「これが、僕が発明した『凄い効き目の惚れ薬』だ」

三十二歳既婚子持ちの男は至って真面目にそう言った。

「中の液体を惚れさせたい女性に振りかければ、その人は目の前にいる人物に強烈な恋愛感情を抱くはずだよ。効果の程は、実際に使用して確かめてみてくれたまえ」

毎度のことながら胡散臭い発明品であるが、もしその効果が本物ならば、三十路に突入しても彼女の一人もいたことのない私にとって、実に魅力的な話に違いなかった。私は、とりあえず使ってみるよと前向きな返事をして、小瓶を受け取り、徳田と別れた。

誰に使うかと思案しながら路地裏を歩いていると、前方から一人の若い女性が歩いてくる。かなりの美人だ。

擦れ違いざま、私は彼女に液体をかけた。その途端、彼女は足を止めてこちらに向き直り、潤んだ瞳で私を見つめた。そして無言で私の手を取り、歩き始めた。惚れ薬の効果が早速発揮され、デートが始まったらしい。

その足が止まった時、目の前にはラブホテルがあった。彼女は艶めかしく言った。

「今夜は夜通し楽しみましょう」

なんとということだろう。惚れ薬の効き目が強力だったばかりに、過程の部分がショートカットされてしまったらしい。性交ならば、風俗店に行つて金を払いさえすれば、恋人のいない私にでも出来る。彼女いない歴イコール年齢の私が望んでいたのは、共に食事をした、手を繋いで買物物したりするといった、恋人同士にしか出来

ない甘酸っぱい一時を楽しむことだったのだが……。

刀隠し

小徳寺の住僧の一休は、仏門に入りながら女に狂い、若くしながら頼才において右に出る者なしと謳われた、風変わりな僧だった。

昼下がりの空が晴れ渡ると、一休は小徳寺の門前で町娘の肩を日替わりで抱いて、よくこんな謎かけをした。

「その洞穴の内側は、普段は冷たく乾いているが、ひとたび温められると水が湧く。これ、なーんだ？」

熟考の末、娘は決まって降参をする。

「それは……お前のこのことだよ」

すると一休は卑しく笑い、娘の股間を着物越しに一撫でする。娘は満更でもなさそうな嬌声を上げて身を振らせる……。

斯様に妙齡の女子からは人気を得ていた一休だったが、信心に凝り固まった和尚はこれをよく思わない。お得意の頼知勝負で打ち負かせば、流石の一休もつけ上がるような真似はしなくなるはず。そう考えた和尚は、一休に対して、日常的に謎かけを出題してきた。

「一休よ、湯船から一步も出ずに、この短刀を見事に隠してみよ」

ある夜、入浴中の一休の前に現れた和尚は、一振りの短刀を彼に渡してそう言いつけた。六寸ばかりの、鰐のない短刀である。

一休は短刀を手に、湯船の中で考えた。今、自分は裸で湯に浸かっている。短刀を隠せるものはどこにもない。さて、どうしたものか。

暫時黙考していた一休は、おもむろに短刀を湯の中に沈めると、水中でなにやら作業を行った。そのちに湯船の中で起立した一休は、刀は隠したぞ、と自信ありげに宣言した。

和尚は湯船を覗き込み、一休の体を隅々まで確かめたが、短刀はどこにも見当たらない。

「確かに短刀は隠れておる。して一休よ、どこに隠したのじゃ？」
和尚の言葉に、一休は勝ち誇ったように微笑むと、己の陰部に指

先を潜り込ませ、膣内から短刀を取り出してみせた。
一休は、レスビアンの尼僧である。

せめてもの償い

野川秀一は自殺することを決意した。家も、家族も失い、所持金も尽きた。悲観的な性向の彼は、そんな己の身の上に絶望して、今生に別れを告げる意を決したのだった。

死に場所に決めていたある河川に到着した秀一は、河畔に建つ一軒家を認めた。その庭に、夏野菜の木々が色取り取りの実を実らせているのを見つけて、彼の腹の虫は大きく鳴いた。彼は三日三晩食事を口にしていなかった。彼は断りもなくその家の庭に立ち入った。彼は赤い実を二つばかりつけたミニトマトの木の前で足を止めた。この小さな実二つで命を繋ごうとは思わないが、瑞々しいそれを最後の晚餐として味わえたら幸せだと思った。罪の意識はあるが、空腹には勝てない。秀一は続け様に赤い実をちぎり、口に放り込んだ。その時、玄関から家の住人が出てきた。秀一は慌てて木陰に身を隠した。若い男女の夫婦だった。二人はハサミとボウルを持って、どうやら家庭菜園の野菜を収穫するらしい。夫婦は熟れていたはずのミニトマトが見当たらないのを不思議がっていたが、ともあれ別の野菜を収穫して、家に戻っていった。

直に死ぬ身であることを免罪符に罪を犯したことを自覚して、秀一は激しい後悔に襲われた。決定事項である死ぬ以外の方法で、彼らに何某かの償いをする必要がある気がした。

秀一は、遺書を書くつもりで用意していた紙片に、ペンを走らせた。そして夫婦が庭に置き忘れていったハサミを手にとった。

夕方、河畔にある自宅を出た夫婦は、玄関先に一通の手紙と二個の小さな赤い玉が置かれているのを発見した。手紙にはミニトマトを盗んだ償いとして用意したと書かれていたが、夫婦にはその玉の正体が分からなかった。

翌日、自宅の近くを流れる川の河口で、
睾丸のない男の屍体が見
つかったことを、彼ら夫婦は知らない。

木下さんと野菜

家庭菜園を始めたとき、収穫した野菜は真っ先に木下さんにお裾分けしようと思った。

木下さんはひよんなことから知り合った、大学生の女の子だ。アパートで一人暮らしをする彼女は、料理は自分でよく作ると言っていた。きっと喜んでくれるに違いない。

季節は進み、夏。

家庭菜園で瑞々しいキュウリがとれたので、木下さんの部屋を訪問し、お裾分けした。

数日後、道で偶然彼女に会った際に、キュウリを食べた感想の程を伺ってみた。

「太さが丁度いいのよね。カーブの具合も絶妙だし。表面の凸凹もいい感じだったわ」

なにやら見かけのことばかり言及されてしまったが、喜んでくれたには違いないようだ。

翌日、大きくなったゴーヤを収穫したので、木下さんの部屋を訪問し、お裾分けした。

後日、駅前で彼女を見かけたときに、ゴーヤの味はどうだったかと訊ねてみた。

「ちよつと太かったんだけど、よかったわ。なにより凸凹が多いのがいいわね」

市販のゴーヤよりは小振りのはずだが、なんにせよ喜んでくれたには違いないようだ。

二種類の野菜をお裾分けして、二種類とも喜ばれて、自信がついたし、やる気も出た。この分なら家庭菜園はこれからも続けていけそう。涼しくなったら、新しい作物の種を庭に蒔いてみるとう。

そして迎えた、冬。

ビギナーズラックとやらなのか、それともたまたま環境がよかったのか、栽培していた大根が見事なまでに太く、大きく育った。僕はとれたての大根を胸に抱いて、嬉々として木下さんの部屋を訪問した。

「こんなに太い大根がとれたんですよ。よろしければ召し上がってください」

木下さんは今回もきつと喜んでくれる。そう信じて疑わなかったのに、僕が差し出したその野菜の大きさを見て、彼女はなぜか顔を真っ青にしていた。

迷える全ての子羊たちへ告ぐ

自分が今まさにウンコをしていることを悟られまいとして、脱糞に伴う一切の音を出さぬよう、毎朝息を潜めて焦げ茶色のものを肛門から絞り出している全ての者たちへ告ぐ。

迷える子羊たちよ。汝、ウンコをすることを恥じるなかれ。

考えてもみよ。君だけではない。生きとし生ける者はみんなクソしている。

……えっ？ 植物はしていない？ それもそうだけど、とにかくまあ、全ての動物はクソしてる。

……えっ？ 便秘の動物中にもいる？ その可能性もなきにしもあらずだけど、まあとにかく、大体の動物はクソしてる。

迷える子羊たちよ。汝、ウンコをすることを憚るなかれ。

考えてもみよ。躊躇うことなどない。天皇后両陛下も。野田総理も。イチローも。乙武さんも。チャン・グンソクも。AKB48のメンバー全員も。みんな毎朝クソしてる。

……えっ？ なにも朝とは限らない？ それもそうだけど、とにかくまあ、みんな毎日クソしてる。

……えっ？ 便秘の人も中にはいる？ その可能性もなきにしもあらずだけど、まあとにかく、みんな大体毎日クソしてる。

——脱糞。それは生き物が生き物として生きて行くために必要不可欠な義務。三次元の世界に生まれ落ちた者に課せられた宿命。

誰がなんと言おうと、したかろうとしたくなかろうと、人間はクソをする。現在も、過去も、そして未来も。それが定めであるならば、十字架を背負った身の上を嘆くよりも、受け入れて前へと進むべし。

全人類よ。迷える全ての子羊たちよ。汝、堂々とクソをせよ。恥じることなかれ。憚ることなかれ。汝、威風堂々とクソをせよ。

迷える全ての子羊たちよ。さあ胸をはって。肛門括約筋を解き放

って。今すぐに、思う存分ウンコをするがいい。

言い分

例えば夕食後、特に疲れてはいない体を居間に横たえて、特に食べたくもない醤油煎餅を口に運びながら、特に見たくもないバラエティー番組を情性で見続けていたとしよう。

その光景を目撃した、その人にある程度近い人間は、きっとその人にこう忠告するに違いない。そんなくだらないテレビ番組を見ている暇があるならば、なにか別の、もっと有意義なことをするべきだ、と。

この意見は、世間一般では正しいものとされているが、果たしてそうだろうか。彼等の言い分は本当に正しいのだろうか。

そうではない、と僕は考える。

彼等の言い分の誤謬は、無意味な時間を過ごすことは遍く無意義だと決めつけていることにある。意味ある時間は有意義。故に逆も然り。彼らはそう考えてしまっているのだ。

断言しよう。それは全般的な外れな考えだと。

例えばあなたは、なにか物事に行き詰まったとき、ない知恵を絞って無理に打開策を見出そうとするより、ただ空を眺めるだけの時間を設けた方が結果的に解決の瞬間が早まった、という体験をしたことはないだろうか。——そう。一見無意味に思える行為や時間がある場合においては一転有意義なものに変わるという事例が、世には存在するのである。

この法則の存在を考えれば、主観的に見て無意味に思える時間を過ごす人間を頭ごなしに否定することの愚かしさが、あなたにも分かっていただけではないだろうか。人は結句、他人の物差しで決められた幸福よりも、自分が幸せと実感できる時間を享受する方が幸福なのである。要するに――。

「なにをゴチャゴチャと屁理屈こねてるの！　いつまでもダラダラとテレビばかり見てないで、さっさと宿題を済ませてきなさい！」

母親は怒鳴り声を上げて僕の言い分を一蹴した。僕は仕方なくテレビの電源を切り、溜息と共に緩慢に腰を上げて、宿題に取りかかるために自室へと向かった。

満月

誇り高き侍の鷹野は、満月の夜、同じ剣術道場生の鷺宮を殺害することを決意した。数日前に起こった、鷺宮がある道場生の授業料を盗難した上、その犯人が鷹野だと放言するという事件、それが契機だった。

鷹野は、武士にとって最も忌避すべき行為は死ではなく恥だ、という考えを持っていた。故に彼は、死をもって自らの恥ずべき愚行を償わず、生き恥を晒す鷺宮が許せなかった。彼が自ら死を選ばぬならば、自分が彼を手に掛ける他ない。そう考えてしまっただけに。

鷹野は口実を設けて鷺宮を河原に呼び出した。なにも知らぬ鷺宮がやって来たところへ、鷹野は物陰から躍り出て、いきなり彼を斬りつけた。鷺宮は鮮血を迸らせて地面に俯した。

悶絶する鷺宮は、自分を斬った男の姿を認めると、命だけは助けってくれと懇願した。この期に及んで生に固執する鷺宮を、鷹野は偏に不愉快に感じた。彼は嘆願を無視して刀を振るうと、一刀のもとに鷺宮の首を切り落とした。

鷹野は崩れ落ちるようにしてその場に膝をついた。そして懷から短刀を取り出すと、着物の前をはだけて、鋒を腹部へと宛がった。

鷹野はもとより、鷺宮を殺害したあとに自刃する腹積もりだった。人殺しの汚名を被って生き長らえることなど、恥を忌む彼にとって考えられない選択だったのだ。

柄を握る両手に力を込め、腹部に刃を深く突き刺した。激烈な痛みが走った。——だが一思いには死ねなかった。凄絶な痛みと、苦しみと、恐怖とが、斟酌なく鷹野に襲いかかる。涙が溢れた。死にたくない、と心の底から思った。命乞いをした鷺宮の気持ち痛いほど分かった。苦しみもがく彼の中では、生と死と恥の価値観は最早完全に逆転していた。

河原一帯は不気味な静けさに包まれている。人は通りがかりそう

にもない。苦悶しながら死にゆく鷹野の醜態を、ただ満月だけが白々と見下ろしていた。

束の間のファンタジー

部屋の換気のため、ベランダに通じるガラス戸を開けた大翔は、鉢植えの傍らで、虫のような、侏儒のような生物が蹲っているのを発見した。小さな体躯、少女のような見かけ、背中に生えた二対の羽根……。それは妖精と呼ばれる生き物に違いなかった。

「私は妖精のリリイと言います。人間界に一人で遊びに来ていたのですが、羽根を怪我してしまいました。申し訳ないですが、怪我が治るまでの間、私を匿ってくれませんか？」

大翔は困惑したものの、いかにもか弱そうな彼女を放っておくわけにもいかない。こうして大翔とリリイの共同生活が始まった。

架空のものとはかり思っていた生物が突然目の前に現れ、共に暮らすことになれば、誰だつて戸惑うものだろう。しかし妖精である彼女は、人間に対して友好的で、尚且つ言語でコミュニケーションがとれるため、同居するにあたっての障害はないといってよかった。共同生活に慣れるに従つて、大翔はリリイの前である行為をするようになつた。それは自慰だつた。愛らしい顔立ち、平らな胸、無毛の女陰、純真無垢な心……。それらの全てが、大翔の歪んだ肉欲を刺激するのだつた。もしこの世が、妖精が公然と実在している世界だつたならば、妖精性愛という言葉が生まれていたに違いない。そう思わせるほど、彼女は、彼女は大翔にとって魅力的な存在だつたのだ。行為の意味を理解していないリリイは、眼前で陰茎をこすられても嫌な顔一つ見せない。そのことが大翔の劣情をさらに煽るのだつた。

数日ののち、別れの時が訪れた。

大翔の御陰で怪我が完治したことに礼を言つたリリイは、別れ際、彼にこう伝えた。

「大翔さんは私を幼い少女のように思っていたようですが、実際の私はおばあちゃん妖精なんです。妖精は、年をとつても、外見的

な変化を伴わない生き物なんです」

リリイと別れて以来、大翔が彼女を拠にして自慰をすることは一度たりともなかった。

ツチノコの発見

親友の北門夕佳にツチノコ狩りに行かないかと誘われたとき、東真一郎は渡りに船だと思った。真一郎はツチノコが実在するなどは一切思っていないかったが、夏休みの宿題である自由研究の題材として取り上げるには逃え向きのイベントだと思ったのだ。

狩りには夕佳の友人の辻菜摘も参加することとなった。彼女も真一郎と同じ思惑のもとに参加を決めたらしかった。

搜索場所は隣町の某山。三人は一泊する準備を整え、現地に集合する手筈となった。

だが当日になって、夕佳が急な体調不良のため、狩りに参加できなくなったとの一報が入った。自由研究がある手前、今になって中止にするわけにもいかない。二人は結局計画を続行することに決め、山中に入ってしまった。

探索は重い雰囲気の中進められた。ツチノコの存在など端から信じていない二人だから、モチベーションは一向に上がらないし、二人は夕佳という共通の友人を持つだけの関係でしかないから、会話が弾まないのだ。そして当然のごとく、成果が上がることもなかった。

夜を迎え、夕食を済ませた二人は、気まずい空気から逃れるように、それぞれのテントへと足早に潜り込んだ。

静寂の中、無為に時間を過ごす二人は、すぐ隣にいる異性の存在を意識せざるを得なかった。それは性欲に通じる感情だった。しかし、だからといって二人が具体的な行動に踏み切ることはない。淡々と夜が更けていった。

夜夜中、テントの外から真一郎の差し迫った声がしたのを聞き、菜摘は目を覚ました。

テントの扉を開けて、彼女は瞠目した。

「ほら辻さん。——ツチノコ、見つけたよ」

そこに佇んでいたのは、雄々しくそそり立つ己のペニスを握り締めた真一郎だった。

菜摘は己の理性が決壊したのを自覚した。

このあと、真一郎と菜摘は、ツチノコと小一時間ほど戯れに興じる。

真夏の残酷物語

高校野球の県予選の準決勝。九回の裏、後攻めの葦川高校の攻撃中。スコアは同点。二死、走者二塁。一打サヨナラのチャンス――。

この痺れる局面で、二塁走者の上田は脂汗を垂らしていた。勝敗を左右する重要な走者となった重圧に冷や汗を掻いているのではない。彼は腹痛を催していたのだ。それも下痢の気配を色濃く含んだ便意を伴った腹痛を。

彼がとるべき行動は、二塁塁審にタイムを要求し、ベンチ裏に引き上げて排便を済ませることだったのかもしれない。しかし勝負事には「流れ」というものがある。折角一打サヨナラの好機を作ったというのに、ここで勢いに水を差すような真似をすれば、自軍に傾いた「流れ」を手放すことになるかもしれない。そう危惧して彼は行動できなかったのだ。

こうなれば上田の唯一の願いは、結果いかに関わらず、速やかにこのイニングが終わることだった。しかしそんなときに限って、打者がファウルで粘る。俊足の走者である上田を警戒して、投手が執拗に牽制球を投じる。

便意が限界に達そうかとした十球目、快音が響き、打者が打ち返した白球は見事に内野手の頭を越えた。上田は肛門括約筋を引き締めて走り出した。本塁を陥れられるかは微妙なタイミングだったが、彼は迷わず三塁を蹴った。差し迫った便意を考えると、一か八かの勝負に打って出るしかなかったのだ。

上田の眼前で、外野手からの返球が捕手に渡った。上田は頭から本塁へ滑り込んだ。

捕手のミットが上田の腹に激しく衝突した瞬間、彼は堰が決壊する感覚を覚えた。

審判は両手を水平に広げたが、上田のパンツの中は紛うことなくアウトだった。

劇的な幕切れに葦川高校のナインが喜びを爆発させる中、上田は一人、諦観したような微笑を浮かべて、静かに涙していたという。翌日の決勝戦。腹痛による体調不良のためにレギュラーの上田を欠いて試合に臨んだ葦川高校は、敗北を喫し甲子園の切符を逃した。

穀潰し潰し

隣り合うお兄ちゃんの部屋から、突然、お兄ちゃんとパパが言い争う声が聞こえてきた。

家計が苦しいんだから、文句を言う暇があるなら働け、この穀潰しが、とパパが怒鳴りつける。お兄ちゃんも即座に口汚く反論する。ママが去年病気のために他界し、収入が減ったので、パパの言う通り、お兄ちゃんも働いてくれないと困るというのは本当だ。でも、だからといって、本人にそう面と向かって指摘しても、感情を逆撫でするだけに決まっている。パパがその点を理解してくれないから、我が家から口論が絶えることは一向にない。

口喧嘩は、夕食の準備をする時間になって、パパが一階に降りたことで止んだ。

見たいテレビがあつたので、あとを追うように階下に降りていくと、台所は血なまぐさい臭いに満たされていた。思わず鼻をつまむを見ると、パパが俎上の巨大な肉の塊と格闘していた。パパ曰く、運良く新鮮な塊肉が手に入ったので、解体しているのだという。我が家にそんな立派な肉を買うお金の余裕などない。会社の同僚の人にも貰ったのだろうか。

夕食の時間、食卓にはホットプレートと、小一時間前は大きな肉塊だったものが扁平にカットされて並んでいた。ママが死んで家が貧乏になって以来、焼き肉なんて食べた記憶がない。私は夢中になつて肉を口に運んだ。

食べながら私は、お兄ちゃんが食事の席に来ないことを不思議に思った。私たち兄妹は、家での食事は必ず食卓でとるよう躰けられていて、お兄ちゃんが引きこもりになつてからもその習慣は守られてきた。それなのに、今夜は一体どうしたのだろう。喧嘩したくらいで降りてこないなんて一度もなかったのに。

「穀潰し、働かずとも穀になる、か」

唐突にパパが意味深に呟いたけれど、その言葉の意味は私にはよく分からなかった。

お兄ちゃんが一階に降りてくることはとうとうなかった。その日の夕食の時間も、次の日も、その次の日も……。

責任

日本はいつからこんな国になってしまったのだろう。こんな国に誰がしたのだろう。

仕事に疲れて乗り込んだ満員電車。その車内には、私が常日頃より抱く憤りの正体が詰め込まれているといっても過言ではない。

大声で談笑に興じる者。床に座り込んで化粧に余念がない者。大音量で音楽を聞いている者。我が物顔で食事をしている者。マナー違反のオンパレードだ。——狂っている。

そしてその周りの者たちは、その狂った者たちに注意さえしない。みな人形のように黙りこくって目を瞑っている。そうでなければ、一心に携帯電話を操作している。そんな小さな画面を熱心に見つめて、一体なにを得られるというのだろう。——馬鹿馬鹿しい。

電車を降り、駅舎を出る。外はまだ明るいうのに、遊んでいる子供たちの姿は見かけない。近頃の子供はみな、学校から帰った家でゲーム、なのだろう。——味気ない。

私が若いころは、今と違って、放課後になると友達と連れ立って屋外で遊んだものだ。虫取り、秘密基地作り、川遊び。自然と触れ合うことで命の尊さを学んだものだ。仲間と時間を共にすることで協調性を培ったものだ。

それと比べて今の若者は、命の大切さを知らないから、身勝手に人を傷つける。簡単に罪を犯す。協調性がないから平気で他人に迷惑をかける。自己中心的で、謙虚さがない。

ふと顔を上げると、前方から一人の男子高校生が歩いてくるのが見えた。その男子高校生は携帯電話を耳に当てて、響くような大声で話をしている。私は眉をひそめた。自己中心的で謙虚さの足りない、協調性のない若者。その典型が目の前にいる少年なのだと思うた。

全く、日本がこんな国になってしまったのは、一体誰のせいだと

言うのか――。

擦れ違いざま、その少年が話し相手に向かって、こんなことを言っているのが聞こえた。

「よく分かんねえけど、多分それ、大人のせいじゃね？」

ある雨の日の実話

雨模様の市道を歩いていると、頭頂の薄いおっさんが道端で一人、雨に濡れながら途方に暮れていた。妙な人だと思いつつ通り過ぎ、小用を済ませて元来た道を引き返すと、おっさんは雨の中、まだ路傍に座り込んでいる。

「どうかしましたか」

僕はおっさんに声をかけた。内心、相手がおっさんではなく、可愛い女の子だったらよかったのに、と思いながら。

シロがいなくなった、とおっさんは言った。シロとはおっさんが飼っている愛犬で、秋田犬だそうだ。二日前、散歩に行こうと犬小屋まで行くと、鎖が千切れていて、シロの姿が消えていたらしい。失踪前日、庭木に悪戯をしたことを厳しく咎めたから、飼い主に愛想を尽かしたのかもしれないのだと言う。

僕は手分けしてシロを捜すことを提案した。おっさんは快くその案に賛同した。単純な協議の結果、おっさんは普段の散歩ルートをもう一度見て回り、僕は近くの雑木林を搜索することになった。

林の入り口には、茂った雑草の中を何者かが突き進んでいたような跡があった。もしかやと思って獣道を辿ると、一本の木の傍らに一匹の秋田犬が寝そべっているのを見つけた。鎖が木に絡まって動けなくなっているらしい。

シロの鎖を外してやり、おっさんと落ち合って彼を引き渡した。おっさんは顔をくしゃくしゃにして喜んでいた。シロも尻尾を振って嬉しがっている。愛想を尽かしたわけではなく、鎖が引つかかっていただけだと説明すると、おっさんは感極まった様子だった。

雨はいつの間にか上がっていた。

シロを見つけてくれた礼だと言って、おっさんは一枚の銀貨を僕に差し出した。昔の外国の硬貨だという。僕はそれを有り難く受け取り、おっさんとシロと別れた。

同じコインなら、使えるものの方がよかった。内心そう思わないでもなかったけど、その銀貨は今でも机の奥に大切に仕舞ってある。

水色の雨傘を差して

—— ■さん。

今日は、あなたに謝っておきたいことがあります。

それは、僕があなたに逢うたびに、違った態度であなたに接していたことです。

久しぶりに逢ったときは、あなたを待ち侘びていたと言ったくせに、毎日のように顔を合わせるようになると、あなたのことを鬱陶しがりましたよね。僕の心が晴れ渡っていた日にあなたが訪れたときは、早く帰ってほしいような素振りをとりました。沈んだ気分の日にあなたが逢いに来たときには、顔も見たくないと言ったことさえありましたね。

僕は、あなたの気持ちを考えようとしなくて、身勝手な態度であなたに相對してきました。そんな僕を、今更かもしれませんが、どうか許してほしいのです。

—— ■さん。

僕があなたになにを言おうと、誰があなたをどう思っているかと、あなたはあなたです。自分が逢いに行きたいと思ったときに、僕に逢いに来てくれるあなたは、きつととても自然体な女の子なのでしょう。

—— ■さん。

僕はすでに知っていますよ。あなたの流すその雫は、涙ではなくて、少なくともあなたにとって涙ではなくて、想いを伝える一手段に過ぎないのだということを。

そのことを知ったのを境に—— ■さん。僕にはあなたのことが、とてもいじらしく感じられるようになったのですよ。

嘘ではありません。僕がこの手紙に書いていることは、全て本当のことなのですから。

ああ、そうそう。書き忘れるところでした。

最近、とても可愛らしい、水色の雨傘を衝動買いしました。また近いうちに、それを差して、今度は僕の方からあなたに逢いに行きたいと考えています。

心根の優しいあなたのことです。きっと迎えに来てくれますよね？

無念の一句

盆が過ぎ去り、今年も短歌甲子園の季節がやって来た。

短歌甲子園とは、都道府県の予選を勝ち抜いた四十七の高校が、甲子園の地にて短歌の出来映えを競う、という大会である。ただし今大会は、従来の四十七都道府県の代表校に加えて、震災で被害の大きかった福島県の某高校も特別に参加することになっていた。

日程は順調に消化され、迎えた決勝戦。勝ち残ったのは、前回優勝の東京代表のA高校。そしてもう一校は、特別参加ながら快進撃を続けてきた四十八校目の代表、B高校だった。

試合は、出されたお題をもとに両校が各自短歌を一句作り、それを発表したのち、その優越を審査員が判断する、という流れで進む。決勝で出されたお題は「海」だった。先行のA高校は下記のような句を詠んだ。

海に浜 水着に白肌 空に雲 夏の絵の具は 二色で足るなり
続いてB校は以下のような句を詠んだ。

大津波 さらった命 その数は 生きたかった 命に等しき
相手校の句を聞き終えた瞬間、A高校の主将の五木は自校の勝利を確信した。B校の句は、テーマが「海」というより「命」だし、その「命」という単語を二度用いているために、些か洗練されていない印象を受けたのだ。

しかし審査員が下した判定は、B校に軍配を上げるといったものだった。審査員の代表者は、その理由を以下のように説明した。

「句としての完成度はA校の方が高いのかもしれない。だが去る三月十一日に我が国未曾有の大災害が起こり、多くの方々が犠牲になった事実を考えれば、命の尊さを謳った句はなによりも価値がある。故に我々はB校が栄冠を手にするに相応しいと判断したのです」

帰りのバスの中、五木主将は人目も憚らずに号泣し、こんな一句を詠んだという。

ず

被災者を 無闇に特別 扱いに する罪憎んで 被災者憎ま

ある男の珍妙なる述懐

そのときの俺は、苛々していたんだ。

俺は虫の居所が悪いと、車の運転が荒つぱくなる悪癖がある。だが、まさか人を撥ねるとは思わなかった。なんたつて、三十余年の人生を歩んできた中で、苛ついて車を飛ばしていたことは何度もあるが、人身事故を起こした経験なんて一度もなかったんだからな。

撥ねたのは女子中学生だった。身動き一つせずに俯しているその子を、車の後部座席にのせて、その場から走り去るなんて行動を俺がとつたのは、やはり気が動転していたからなんだろうな。積み込んでどうするのか。それを考えた上での行動なんかじゃなかったね。だから走りながら、その子をどうするか考えた。そうして思い立った方法が、その子を犯すというものだったんだから、なんのこっちゃって話だよ。でも仕方ないよ。バックミラー越しに見えたその子の白い太股が、いかにも美味しそうに見えちゃったんだから。斯くして俺はその子を犯したわけだけど、欲望を吐き出し終わると、現金なもので、途端にその子のことが邪魔に思えてきた。この子をどう処理するか。それを改めて考えた。

逃がしたら、この子はきっと警察に被害を訴えるに違いない。ならば、殺すしかない。

そう結論付けた俺は、その子を絞殺して、死体を山中に遺棄したんだ。これで万事丸く収まった。正直な話、そう思ったね。

だけどそれで上手くいくようじゃあ、世の中未解決事件だらけって話だよ。あえなくパクられた俺は、裁判で無期懲役食らって、今はブタ箱の中で暮らしている、というわけだ。

人生つてのは恐ろしいね。なにせあのときの俺は、ただ苛ついていただけで、転がるようにどん底まで落ちちまったんだから。しかもその苛立っていた理由が、女房が昼食に作った炒飯がクソ不味かったからだって言うんだから、笑うに笑えねえ。

人生とは炒飯一皿で狂うものなり。人生棒に振りたくなけりや、
あんたも覚えておきな。

影

馬鹿みたいに暗い夜だった。

俺は一人で夜道を歩いていた。コンビニで無益に暇を潰した帰り道だった。町は永眠しているかのように沈黙している。吹きつける夏の夜風は生温く、肌に不愉快だった。

曲がり角を折れようとしたとき、いきなり眼前に人影が躍り出て来た。暗くて顔は見えないが、俺と同年代と思しき若い男らしい。

「俺は二ートだ！ 文句あるか！」

いきなり男がそう怒鳴った。興奮したような声だった。男の発言の真意が理解できなかった俺は、啞然とその場に立ち尽くした。

「俺は二ートだ！ 現状働いてないし、今後働く気もない！ 文句あるか！」

再び男が叫んだ。どう返答していいか分からない。問答の意味と正答の行方はともかく、この男は関わってはならない、危険な人物であるには相違なく思われた。

俺は一言、小声で「文句はない」とだけ呟いて、男の横を通り抜けようとした。

刹那、脇腹に激痛が走った。反射的に痛みの発生源に利き手を宛がうと、指先に生温かいぬめりを感じた。血だった。男に刃物で刺されたのだと理解した瞬間、大地を踏み締める足の力が忽然と失われたような感覚があつて、俺はそのまま地面に俯せに倒れ込んだ。

肩で荒く呼吸をする。酷く恐ろしい。男の存在が、そして死ぬことが。唇が無意識に動き、「殺さないでくれ」と悲愴に懇願を繰り返す。顔色を確かめようと、首を持ち上げ、眼前に佇立する男を見上げた。

そのとき、夜空を覆っていた黒雲が左右に割れ、十六夜の月が漆黒の中空に現れた。降り注ぐ淡い月光が男の顔貌を照射する。

男の顔は、俺の顔と瓜二つだった。というより、俺の顔そのもの

だった。

俺は、男に誤答を返し、結果刺されたのだと悟った。津波のような後悔が押し寄せたが、もう遅い。薄れゆく視界の中で、もう一人の俺が、役目は終わったとばかりに踵を返した。

人種と偏見

若者の間で人気の女性シンガーのサラ・ワトソンは、日本在住のアメリカ人だ。

そのサラが、某大学で講演を行うことになった。テーマは「人種と偏見」。

「私は日本で生まれ、十五歳でアメリカに渡るまでの間、ずっと日本で過ごしていました。だから日本語は喋れましたが、青い目に金髪と、日本人とは違う外見をしていましたから、行く先々で好奇の目で見られました。幼少時の私は、それが嫌でたまりませんでした」

サラは端正な顔を歪めて一同の顔を見渡しながら、切実に言葉を紡ぐ。

「だからアメリカに行ったとき、周囲の人々が私の容姿に過度の注目を注がないことを、私は大変喜ばしく思いました。道を歩いていても、誰も私のことを物珍しそうに見ないのです。そのことが私には嬉しくて、人混みの中で思わず涙を流してしまったほどです」

そこまで言ったとき、客席の中央付近に座っていた青年が拳手した。黒い瞳に黒髪の、典型的な日本人、といった風貌の青年だった。サラは快く青年に発言の機会を与えた。青年は起立し、よく通る声で喋り始めた。

「周りの人間と違う見た目をした人間がいれば、その人に思わず注目してしまうのは、誰だって同じではないでしょうか。全体において異質なものを注視してしまう反応は、反射的なものであって、悪意に起因する行動などでは決してないはずです。それなのにあなたは、なぜ、それが日本人特有の悪しき風習であるかのようにおっしゃるのでしょうか」

会場は異様な緊張感をもって静まり返っている。青年は毅然と言葉を続けた。

「悪意を持っているのは、金髪碧眼のあなたを好奇の目で見る日本

人ではなくて、日本人を悪者にしたがるあなたなのでは？」

青年の指摘が正鵠を射たものであったか否かは誰にも分からない。ただ、青年のその意見に対して、サラは一切反論を述べられなかった。これは歴とした事実である。

平成米騒動

今春に発生した原発事故は、第一次産業に従事する人々に甚大な被害をもたらした。

例えばF県のX町の農家・大原さん宅の田圃でとれた米からは、検査の結果、基準値を上回るセシウムが検出され、出荷停止を余儀なくされた。

しかしその半年後、再び行われた検査で、セシウムの値は基準値を下回るという結果が出て、大原さんの田圃でとれた米は晴れて市場に出荷される運びとなった。

その結果を受けて、大原さんは記者にインタビューを受けることとなった。

「安全という結果が出ましたので、安心してX町でとれたお米を食べて頂きたいと……」

「本当に安全なんですか？」

若い女性記者の心ない一言に、大原さんは太い眉をつり上げた。

「検査でそういう結果が出たじゃないですか。町長さんから安全宣言も出ましたし……」

「だったら、大原さんが食べて、安全だということを証明してくださいよ」

思いがけない一言に、大原さんの表情が固まった。記者は追い打ちをかけるように言う。

「出来ないんですか？ 本当はセシウムたっぷりだから、食べられないんですか？」

記者一同から「食べる」コールが大原さんに浴びせられる。どこからか白米が盛られた茶碗が用意され、大原さんの前に置かれた。

大原さんは泣き笑いの表情を浮かべると、白米を勢い良く掻き込み始めた。その瞳からは止めどなく涙がこぼれ落ちる。間もなく大原さんは、茶碗の白米を一粒残さず完食した。

「おお、順平か？」

大原さんはその夜、K府に一人暮らしをしている息子の順平に電話をかけていた。

「米、いつも通り下宿先に送ったからな」

「それ、親父ん家で作った米なの？」

「いや、N県産だ。事故以降、家でとれた米は全部、他人様に売ることに決めてるから」

コンビニ小話

コンビニの自動ドアを潜り、トイレの前を通りがかった僕の目に、半裸の若い男女が性交をしている光景が飛び込んできた。見間違いなどではなかった。レジからは死角になるその場所で、二人は息を殺して、場違い甚だしく愛の営みに励んでいるのである。

公共施設などの不特定多数の目につく場所で、秘密裏に、あるいは堂々と性交を行う趣向のアダルトビデオが存在することは知っていた。しかし、実際にそれが行われている様を目の当たりにすると、は夢にも思わなかった。

「AVの撮影ですか？」

小声で訊ねたが、女は答えない。男の腰の動きに連動して、胸板の上の大振りの乳房がダイナミックに揺れ動くばかりである。

一方の男は、こちらに顔を向け、口を蠢かせこそしたが、声が発せられることはなかった。行為を続けながら他人と口を利くことは、案外難しいものなのかもしれない。

「お客さん、なにやってるんですか！」

突然の声に振り向くと、店員がこちらに走り寄ってくるのが見えた。どうやら行為が露見してしまったらしい。

その場を去ろうとした僕を、店員が腕を掴んで引き留めた。そして有無を言わず店の外へ引っ張っていかうとする。なにをするんですか、と抗議すると、店でそういう行為をされるのは迷惑だから出て行ってもらうんです、と店員は憤然と答えた。どうやらこの店員は、僕が二人の仲間だと思っているらしい。

思われたなら思われたで別に構わないが、ここで買うつもりだった夕食をまだ購入していないにもかかわらず、店を追い出されるとなると甚だ都合が悪い。僕は咄嗟に、未だに性交を続けている二人に向かって叫んだ。

「僕は、あなたたちとは無関係ですよね？」

しかし女は無言で胸を揺らし、男は腰を振りながら口をぱくつかせるばかりだった。

僕がコンビニから追い出され、夕食を買いそびれたのは言うまでもない。

V S 引っ越せおばさん

新しく住むことになった家の隣家に住む河野さんは、闊達で親切な奥様だった。貰い物をお裾分けしたり、顔を合わせたら世間話をしたりと、関係は当初は良好だったように思う。

しかしある朝、布団を叩く音が煩いと、私が河野さんに不平を訴えたのを境に、私たちの間に不穏な空気が漂い始めた。私としてはそんなつもりはなかったのだが、河野さんは言い掛かりをつけられたと感じたらしかった。

河野さんが奇行を見せるようになったのは、その翌日からのことだった。

「引っ越せ！ 引っ越せ！ さっさと引っ越せ！ どつくぞ！」

などと節をつけて喚きながら、一日中ベランダで布団を叩くようになったのである。

私は当然、音を止めてもらおうよう懇願した。けれども河野さんは頑として取り合ってくれなかった。主張する通り、私が引っ越すまで断乎として行為を止めないつもりらしい。

知人の弁護士に相談に行ったが、この町に斯様な迷惑行為を取り締まる条例はないらしい。しかも具体的な被害が出ていないため、彼女を法的に訴えることも出来ないという。

隣家からの騒音は日ごとに喧しさを増していく。いつ終わるとも分らない地獄のような毎日に、私は今にも気が狂いそうだった。

しかしある日を境に、布団を叩く音はすっかりと止んでしまった。それどころか、河野さんの姿すら見かけなくなった。怪訝に思い、三軒隣の家の奥さんにそれとなく事情を伺ったところ、河野さんは腱鞘炎の療養とかで、実家の方に帰っているという。

河野さんは、度を超して布団を叩いた結果、腕を痛めてしまったらしかった。

斯くして河野さんが引き起こした奇妙な騒動は、河野さんの自滅

という形で幕を閉じ、私は安心して眠れる夜を取り戻した。

でも、怪我が治って河野さんが戻ってきたことを考えると怖いし、やっぱりあの人の言う通り、隣町にでも引っ越そうかしら。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1413j/>

阿波野治の八百文字劇場

2011年11月4日14時03分発行